

衆一人江戸定詰ニ被 仰付候而ハ、御國元物主之出入司々、大物主之御家老衆へ相窺申御用、つうへ可有御座様ニ奉存候、江戸へ度々罷登、相窺申候ハ、御國之御用滯可申候哉、惣而急速ニ相調可申御用指延申候時ハ、不知御損之義罷出、品ニ分民之困窮ニも罷成事可有御座と奉存候、

一物主と申義ハ、重キ御事と奉存候、徳を以諸人和シ申候様成人ハ各別、常躰之人柄ニ而ハ、輕キ職目之者相務候ハ、そ志り多、人情ニ合申間敷様ニ奉存候、左候得者、却而 御爲ニ罷成間敷うと奉存候、大物主之御家老衆へ相達候義、書狀を以爲申登、覺書を以相達申候而ハ、文言之理合計ニ而相考、指圖被仕候而ハ、自然理ニ叶不申義可罷出様ニ奉存候、押返シ申達義、往還之内、御用滯申義可有御座候、最前も申上候通、大物主之御家老衆兩人、江戸御國隔年ニ相務被申候ハ、物主之出入司衆難相極事ハ、右大物主へ相窺、相極申候ハ、そ志りも無御座、御用滯

大物主ノ
江戸兩國人
ヲ隔年ニ
許シテ
勤メシム
ル事

申義有御座間敷と奉存候、物主威備リ不申候而ハ、諸人輕シ、御用ニ滯も可有御座様ニ奉存候、已上、

存人之通可申上旨御意ニ付而、不顧憚如此申上候、已上、

(天和三年)

八月廿一日

大浪十郎衛門

松林仲左衛門

中務様

修理様

伊賀様

一九六二 田村圖書屋代五郎左衛門連署狀寫

覺

於御國元、拙者共三人之内、一人物主ニ被仰付可然哉否之段可申上旨、被仰出候、乍憚至極、拙者共愚案ニ奉存候者、一人仕、大キ成事を執行申候

一人物主
ノツイテ
ノ意見

ニハ、第一私を去り、其々之御役人心を盡、物主ヲ助申様ニ仕懸、其外支配ニ無之御役人衆も、道理ニ屈シ、達而非義を不申様ニ仕、勿論同役にも心を合、少も奢りぬき義不仕、誠を本ニ仕、尤每事ヲ大躰にも致合點、巧言を以被惑不申様ニ仕、且又二六時中、御用之事無怠吟味仕候人柄ニ無御座候ハ、還而 御爲ニ罷成間敷ト、乍愚旨奉存候、拙者共ハ不及申上ニ、武田伊右衛門義も、右之通ニ可仕タハ不被申上候、只今迄ハ、同役三四人之勢ヲ以諸事相勤申候處ニ、一人物主ニ被 仰付候ハ、右之人柄ニ無御座候而ハ、御用之障礙ニ可罷成ト奉存候條、當分之通被差置、御買米并御買米方に被相付、御船方計如跡々物主被 仰付可然奉存候、以上、

買米方船方ノ事

(天和三年) 八月廿一日

屋代五郎左衛門

田村圖書

柴中務様

小修理様

佐伊賀様

一九六三 田村圖書屋代五郎左衛門連署狀寫

覺

一物主一人被 仰付候而ハ、御國元々御當地に罷登候時分、又病氣ある之節、障礙可申ウと奉存候、乍去物主差合申候時分者、殘同役相勤申様ニ被 仰付候ハ、是ニ者障礙可有御座間敷ト奉存候、
 一御買米并御船方物主被 仰付可然奉存候、納方御遣方物主ニ、御買米御船方被相付候而ハ、彌仕兼可申ウと奉存候、
 一物主被 仰付候而者如何之様ニ奉存候、私共三人一致ニ申合、可罷成程ハ相勤、理之能方に相極、若了簡不同之節者、物主之御家老衆に相窺申候ハ、御爲ニ可罷成様ニ奉存候、以上、

(天和三年)

八月廿一日

屋代五郎左衛門

柴中務様

小修理様

佐伊賀様

一九六四 堀田正仲書狀

猶々、五ツ程も被遣候ハ、其内女鹿二ツ計被指越御尤存候以上、

一筆致啓上候、先以 公方様益御機嫌好被成御座候間、可被御心安候、次其元彌御堅固御休息可被成と、珍重之至御座候、然者御領分ニ白キ鹿御座候旨、此度稻葉丹後守咄ニ而承リ申候、彌左様ニ御座候ハ、被指上可然存候、澤山ニ御座候ハ、四ツ五ツ淺可被獻候、右之段筑前守も申候、山よ直ニとらへ、御當地御庭へ放シ申候ハ、殊之外荒可有御座候間、子畜歟、又ハ其元ニ而とくと御懷、被成御飼而可被進候、右之段爲可得貴意

白鹿ノ獻上ヲ勸ム

如此御座候、恐惶謹言、

堀田下總守

(天和三年) 九月九日

正仲(花押)

松平陸奥守様

八々御中

一九六五 伊達綱村書狀案

御札令拜見候、先以 公方様益御機嫌能被成御座之旨被仰下、恐悅奉存候、然者國許ニ白鹿有之旨、稻葉丹後守殿咄被成御聞候、獻上仕可然思召候、澤山ニ有之候ハ、四ツ五ツも指上、女鹿をも指添可然由、就其委被仰聞御紙面、一々致承知候、筑前守殿も御同前被仰候由、是又承知仕候、少ハ御座候得共、いきを切、又ハけが仕候而、存様ニ指上候儀難成存候、一ツ二ツハ何とそ指上申儀も可有之と奉存候、然處ニ當領内ニ而、昔々白鹿者神物と申傳、少もあさり申儀無之候、政宗代不存候哉殺候者有之、死罪

白鹿ヲ神物トス 罪ス者ハ死殺

ニ申付、鹿を祭祀を建申候、奥州之一宮鹽竈大明神鹿を神物ニ仕候、左様
故り、國民も殊外慎申候、右之通ニ御座候間、献上仕候儀延引可仕候、萬一
御内意ニも御座候哉、左候ハ、勿論献上仕ニ而可有御座候、左様御座
候ハ、早々可被仰下候、雪之時分ニ罷成候ハ、取兼可申候、右之品々、
尤筑前守殿ニ被仰上可被下候、恐惶、

(天和三年)
九月十五日

松平陸奥守

堀田下總守様

貴報

一九六六 堀田正伸書狀

十五日之貴札、乍御報致拜見候、先以 公方様益御機嫌能被成御座候之
間、可被御心安候、然者御領内白鹿之儀、丹後守咄よて承候間、可被指上之
旨申進候ニ付而、委細被仰下候御紙上之趣、一々致承知候、筑前守ニ後申

聞候處、左様成分みて御座候者、御無用ニ可被成候、差而御内意よても無
御座候、左様御心得可被成候、將又其許彌御堅固御座候由、珍重御事御座
候、此表相替儀無之候、尙重而可得貴意候、恐惶謹言、

堀田下總守

(天和三年)
九月廿三日

正伸(花押)

松平陸奥守様

御再報

一九六七 阿部正武堀田正伸連署覺書狀

口上之覺

御感狀或 御書、或御褒美、先祖ニ被下候趣、并家來之者よも有之よをひ
て、其品委細書付、可被差出候、以上、

(貞享元年)
正月廿二日

堀田下總守

(正武)
阿部豊後守

松平陸奥守殿

一九六八 堀田正仲書狀

(糊封ウハ書)

松平陸奥守様

堀田下總守

貴簡致拜見候、先頃就被 仰出候儀、委細預示候趣、令承知、豊後守殿に後申談候處、台徳院様御代迄之儀、被差出可然候、御近代ニ而後、重品有之候者、可被成御書出候、恐惶謹言、

(貞享元年) 二月廿五日

正仲(花押)

松平陸奥守様
貴報

書上ノ範

一九六九 桑島宗次書狀

猶々、漸々御參勤近寄、諸事御取込可被爲遊と奉存候、目出度頓而可奉得尊意と、大慶ニ奉存候、已上、

奥州様方御書被成下、拜上、殊今度 公儀御用ニ付而、從、權現様御代以來 大猷院様御代迄、御先祖様并御家中衆御頂戴之 御書之寫、阿部豊後守殿堀田下總守殿に被指上候之由、依之 權現様御書之内ニ拙者祖父万機事^(親義) 御文言ニ御座候ニ付而、御書之寫三通迄被下之、扱々御事多被爲成御座候處ニ、被爲懸御心、不淺忝奉存候、私先祖之儀ニ御座候得共、ケ様之儀者毛當不存罷有候處ニ、過分至極ニ奉存候、御次而之刻、御前之儀者何分ニ被可然様ニ被仰上可被下候、恐惶謹言、

桑島孫六

(貞享元年) 三月十二日

宗次(花押)

佐々伊賀殿

先祖及
家來ノ
感ビ
上ノ
狀
等
ノ
書

一九七〇 阿部正武堀田正仲連署狀

御札令披見候、最前如相達候、先祖并家來之者項戴之御書寫、都合三册、以使者被相越之、請取候、恐々謹言、

堀田下總守

(貞享元年)

三月十三日

正仲(花押)

阿部豊後守

正武(花押)

松平陸奥守殿

一九七一 久喜鷹場村數覺書

(表紙ウハ書)

御鷹場村數之覺

久喜
新町

一政宗様先規御鷹野被爲遊候村數之覺

政宗先規
ノ鷹場

幸手領

幸手領之内

天神嶋村

吉野村

上戸村

安戸村

平次賀村

志邊内村

遠野村

貳本木村

佐左衛門新田

并塚村

藤堀村

蓮浪村

下谷村
下野村
原嶋村
大嶋村
下高野村
杉戸町
清次村
藏松村
堤根村
本江村
小淵村
八町目村
柳原村

むらう村
新川村
大塚村
才場村
ぶさご村
長間村
中野村
平野村
下吉羽村
和田村
木立村
上吉羽村
權現堂村

百間領

宮内新田

幸手町

右合四拾村

一百間領之内

須賀村

道佛村

蓮谷村

西原村

戸崎村

中村

右合テ六ヶ村

一岩付領之内

野田村

岩付領

騎西領
羽生領

爪田谷村

寺塚村

高岩村

久米原村

右合五ヶ村

一騎西領羽生領之内

野牛村

篠津村

樋之口村

原村

除堀村

川新井村

吉村

三ヶ村

早川野村

宮宿村

戸ヶ崎村

藪莖村

鴻莖村

戸室村

中之目村

騎西町

根古屋村

牛重村

日出安村

正能村

戸崎村

道地村

田ヶ谷村

外田ヶ谷村

西ノ谷村

上會下村

上崎村

下崎村

明願寺村

礼羽村

馬内村

荒川村

下ノ村

山王林有

志田見村

串作村

右合三拾五ヶ村

惣ノ八拾六ヶ村

右

先規御鷹野被爲遊候場所

久喜領鷹場

久喜新町

内ニ下村有

本町

小久喜村

内和田村市ノ坪村

野久喜村

内ニ神鳥村

青毛村

内ニ中島村有

栗原村

吉羽村

和戸村

内ニおきノ山村

國納村

内ニ八川内村有

袋村

内ニおきそ縁村
内ニ屋流るる村

下早見村

青柳村

江面村

所久喜村

二丁町村

六万部村

割目村

今鉢村

内ニ川妻村有

中曾根村

油井ヶ嶋村

常泉村

小濱村

大室村

辻村

上清久村

下清久村

上早見村

久本寺村

中妻村

水源村

舟越村

下高柳村

上高柳村

内ニ新堀村有

内ニ籠宿村

内ニ原村有

神曾村

久下村

花崎村

篠崎村

大栗村

八山村

川口村

鷺宮村

栗原村

下新井村

藤梅村

上内村

右合四拾五村

是ハ、久喜領御鷹場之村々、

貞享元年

武井十兵衛

子、四月十七日

中里右馬之助

落合藤九郎様

一九七二 白石義時先祖以來事蹟書上

追而御尋付申上候覺

白石時直ノ事蹟
釜石一揆

一拙者祖父白石豊後儀者、慶長五六年之比ハ、御扶持人ニ而無之由、被及承候、釜石一揆ハ參候節ハ、地下人ニ而罷出候哉、且又氣仙ハ、右之節薄井囚獄と申者、釜石ハ罷越候由、是亦野伏ニ而候哉、御聞合被仰上候様ニと、佐藤木工并落合藤九郎ハ、御覺書を以被相尋候付、品々事長キ儀ニ御座候得共、御急用ニ御座候間、白石豊後蒙御扶持申候證據可申上ため、文祿四年二月廿一日ニ從 貞山様地形拜領仕候 御墨印、白石

時直ヲ金山大肝煎トス

甚之助手前ニ有之候を寫、指上申候、其外天正拾九年七月十八日ニ、白石十郎左衛門屋敷違亂不可有之 御朱印之寫、是又指上申候、十郎左衛門ハ豊後事ニ御座候

一白石豊後儀、葛西滅亡已後所窄人ニ而罷在候處、天正貳十年之比、御金山大肝煎ニ被 仰付、東山者不及申、登米江刺中迄、御金山指引仕候、慶長五年、苅田郡之内白石之城を、 貞山様ニ而被爲攻候、其節豊後ニ可罷上由被 仰付候間、東山之御金掘、其外御百姓頭立申者共召連罷登候節も、馬上ニ而罷出候事、

仙臺城ノ取立

一右之通、御金山大肝煎役勤罷在候處、慶長五年ハ六年中、仙臺ニ 御城ヲ御取立、同七年 貞山様被爲移、大肝煎職豊後甥小野寺長門と申者ニ被仰付、豊後ニハ、仙臺大町壹町目ニ屋敷被下置、御番外ニ而、知行高拾五貫文ニ而御奉公仕候處、慶長拾七年、年五十九ニ而頓死仕候故、品々申上候得者、存生之内、度々御奉公仕候者ニ候間、家督嫡子正吉ニ無

薄井四獄
ノ事蹟

白石十郎
左衛門ノ
事蹟

御相違被 仰付、其上御加増拾貫文被下置之、虎間ニ而御奉公仕候由承候得共、其時之御番頭ハ覺不申候、右之正吉、貳十五歳ニ而病死仕候得共、嫡子半十郎、後ニ清右衛門と申者ニ、家督被 仰付、義山様御代ニ、要山様ニ被相付候已後も、江戸仙臺御奉公仕候而、四拾貳歳ニ而相果申候而、嫡子甚之助ニ家督被 仰付、只今迄御奉公仕候、右之正吉儀ハ、拙者ためニハ伯父ニ御座候事、

一 氣仙郡薄井囚獄、野伏ニ御座候かと御尋ニ御座候、囚獄儀ハ大肝煎仕候、其節ハ馬上ニ而同郡之頭立申候御百姓共召連、南部釜石へ罷出候由申傳候事、

一 拙者親十郎左衛門儀ハ、豊後二男ニ御座候を、豊後甥ニ小野寺長門と申者養子ニ罷成候を以、寛永拾年ニ被 召出、御知行五貫五百八拾三文之所、佐々若狹を以被下置候、其後二割出被下、六貫七百分ニ罷成、祖父豊後代ハ被仰付、御金山本判御用相勤罷在候處、年七十余リニ罷成、

寛文貳年ニ隱居被 仰付、右六貫七百分、新田起目壹貫貳百七拾壹文取合、七貫九百七拾壹文ハ、拙者兄白石文左衛門ニ被下置候、文左衛門儀者、義山様御代ハ、綱宗様御代迄、定御供被 仰付候、拙者儀ハ、文左衛門本御切米四兩四人御扶持方被下置、祖父豊後代ハ、御金山本判御用被 仰付、相勤罷在、御番所御廣間ニ御座候、岩出山御時代、天正二十年之比ハ當年迄、九十年余三代御奉公仕候、以上、

白石正兵衛 (黒印)

義時 (花押)

貞享元年六月十五日

河東田長兵衛殿

一九七三 淨眼院 消息

綱村生母 三澤氏

(包紙ウハ書)

貞享元年八月七日生日時之事

(封目) (綱村黒印)

母公御書付一通

(萬治二年)

三月八日巳未刻

な茂く、御機嫌の御事、あすく御めてさくそんくあいらせ候、めてさ
と、

昨日仰らま候御書つぎ、今日取よせみりぬ、内々あさかあきり
はんとそんく候所へ、御志くや被下候、幸とあきり、めてさくと、

ト

誰よても

ちやく

御申

一九七四 山田重安書狀

猶以、陸奥守殿之御書付並寂前御自分様は此方へ進申候書付兩通、則返
進仕候、以上、

一昨日者御手札并從陸奥守殿之御紙面、一々披見仕候、親十太夫出生ハ
永祿拾年ニ而御座候、七拾壹歳ニ而病死、當年四拾九年ニ罷成候、來年

(重利)

五拾年忌ニ而御座候、

一親十太夫儀、大坂 御歸陣以後三四年過候而、御鐵砲頭與力拾騎足輕

三拾人被 仰付候、

一寂前も申達候通、水戸殿御座席ニ而之咄之義、先祖書ニも彌々相見不

申候、且又他家之山田氏先祖ニ御弓頭被仕候方、早速ハ難承合候間、左

様御心得可被下候、

一名生城九戸兩字、私爲心得被仰聞候御紙面、過分至極候、右之段宜被仰

達可被下候、猶期貴面之時候、以上、

(貞享二年カ)

七月二日

(重安)
山田左兵衛

(正辰)
稻葉主水様

一九七五 山田重安書狀

尙以、陸奥守殿御手紙則致返進候、以上、

先刻者御手帟拜見、并從陸奥守殿之御自筆之御帟面、具致拜披候、親十太夫蒲生飛驒守氏郷ニ罷在候内、御家に被 召返候故、終罕人不仕候、蒲生秀行宇都宮に御入之節、十太夫儀も宇都宮へ參候哉、又會津ニ相殘候哉、且テ不承覺候、尤書記候而指置不申候、左様御心得可被仰達候、以上、

(貞享二年カ) 七月二日

山田左兵衛

稻葉主水様

一九七六 山田重安覺書

○コノ覺書蓋シ貞享二年ノモノナラムカ、

覺

慶長五年十月、最上義光(兼續)与景勝家來直江山城迫合ニ付、最上に政宗加勢差遣候人數之内、小田邊大學石川彌平与申者有之候、右大學指物白地ニ赤琵琶之紋付候、敵方よても赤琵琶之紋付候指物を指候武者一騎來、大

政宗ノ最上加勢 小田邊大學ノ事蹟

學彌平ニ向申候者、我等事諸國を武者修業ニ廻ル者ニ候、討捕候首一相送候由ニ而、大學前に投出候處、大學言葉を合、則敵陣に乘込、早速首一討捕、件之武者に返送候、其後水戸殿に政宗罷越、軍物語有之候席座中ニ、右大學事を物語被申衆御座候付、大學子共主殿与申者を、折節政宗供ニ召連參候由申候得者、則主殿を座敷迄被召出候處、御武頭衆山田氏之人、大學事を主殿ニ委細被相尋候間、政宗不審ニ存、承候得者、先年武者修業仕候人ニ而候、大學其節之働をも物語被申候由御座候、名相知不申候、以上、

一九七七 淨眼院綱村生母 三澤氏消息

○コノ文書ハ、綱村ニ宛テタルモノナリ、

(包紙ウハ書) 貞享二年七月十一日 (封シ目) (綱村黒印) 御袋様御用之御書 (封シ目) (綱村黒印)

返く、五度と御ささめ御さ候ても、御機嫌よても、何きりなふそ御さ、

目りよても候へ、き目めをさき御事ニ御さ候、とくく、御機嫌よきり
 めてさきとそん、さあ、御らん目けられ候て、さあ川様より仰進
 一られ候御時分、御あいさの仰進られ候御事、御心く、さあきやうよ仰進
 られ下されへ候、との外之御一やうきよて、さこの御事を、御くろふ
 お不しめ候ま、此さひの御仕舞の御事、目れく、そのさあ、御事
 候ぬ、御心よく御あいさの仰進られ下されへ候、そのさめ申上候、ゆ
 め殿へも、目れく申候、仙臺様へ、目く身うさより申あげ候、いと申
 おきら、めてさく、

宗贊生靈
ノ祝儀ニ
綱宗ヲ饗
ス

綱宗宗贊
ノ演能

又申あ、十日ニは、(宗贊)ゆめ殿より、御生身玉の御祝義、御せん御あ
 事さされ、御ゆひよく、さあ川様ニも御きさんの御事ニてめてさ、そ
 事ニ付、御慰御志まいニてもあそをされ候、いと仰ら候ま、目れ
 く申候、ゆめ殿い、やうさされ、御まいさされ候を、つるよみ、
 ぬま、い、やうさされ、御まいさされ候を、み、さきと申候へ、
 殿様ニても、いろく御忍ん、よのよ、仰ら候へ共、わさく、そん

候、ささめて 殿様ニても御らん、さされさくお不しめ候、いとそ
 ん、さきつて、御まへニて仰ら候ニも、ゆめ殿、御出候御時分、
 御あいてさされ候ても、くる、ゆま、きやうニ思しめされ候との御
 事うけ給候ゆへ、そこもと様へ、目れく、そのさあ、御事、目り申あ
 け候、いと申、殿様、ゆめ殿をうり御い、やうさされ、御あいて衆あ
 と、つ、のと、成りニて御仕舞あそ、候、右之と成りニ御さ候、さ
 やうよ思しめされ下されへ候、殿様ニても、ゆめ殿い、やうさ
 れ、御まいさされ候を、さめて御らんせられ、との外之御悦よて御さ候、
 一ゆめ殿、殿様御い、やうあそをされ、御まいさされ候を御らん
 一、か、け、あ、られ、あ、ちとのへも、目れく、方より、御國もと
 へも申上候、いと申、御留主中御能五度御さ候、御ささまりの
 よ、申され、御い、やうよてあそ、候、も、さ、のつ、
 もあり候、いと申、御事ニ御さ候、此さひの御仕舞、五度の外ニ

もあそいゝかされ下されへく候、めてよくと、

(貞享二年)
七月十一日

一九七八 奥山常辰覺書寫

覺

一万治貳年二月五日

(忠宗夫人徳川氏)

孝勝院様御卒去被遊候付、諸事諸隱便之節、同八

孝勝院ノ
卒去
綱村ノ誕
生ニ諸事
隱密ニス

日大守様御誕生被遊候、其節大條兵庫事者 孝勝院様御尊骸ニ被相

付、御當地へ罷下候付、御産所之御用、從 綱宗様私ニ諸事御隱密被仰

付、御誕生之御墓目私相勤申候、御七夜之内御目見初仕候、其節我等存

候者、從 公儀綱宗様へ御婚禮も無御座間、此度之若子様は私一生御

奉公仕事と存詰罷在候處、 綱宗様御行跡無然候付、御隱居願可被仰

上爲御相談之、(立花忠茂)好雪様兵部殿方里見十左衛門被相下、御願被仰上候

而、御進退半分歟、三ヶ一ニても被相立候ハ、堪忍可仕候哉、各内存之

綱宗ノ隱
居願

常辰ノ存
分

通可申上由、御一門衆中始、私共迄被仰下候、何_後閉口ニ候間、我等申出

候者、一大事之儀候間、早々御存分之通、被仰上可然由申候得共、壹人も

不被申出候付而、左候ハ、拙者存分之通申達候、御家無恙様ニ奉存

故、綱宗様御隱居之儀御願ニ候、然處御進退被相減候而ハ、無益儀ニ御

座候間、少も御相違ニ付而ハ、御城を枕ニ仕外無之と存詰候間、御進

退ニ御相違可有之と被思召候ハ、公儀ハ之御願被相扣、御進退禿

次第仕度候、對 公方様ハ綱宗様御不忠之儀無之、御不行跡故被仰立

儀候間、正宗様御忠節之御事と申、御家無恙様ニと存迄ニ而、綱宗様御

隱居御願之儀も、御兩人様被思召所、御尤と申事之由、御挨拶申上候、其

節茂庭周防所方被申越候者、右之御願相調候ハ、誰を 御跡式ニ可

申立哉と、我等所へ被申越候間、以之外腹立仕、誰と申儀可有之哉、龜

千代様方外無之候、其外ニ候ハ、御進退禿申候共、申立間敷由、成程稠

挨拶仕候、其故ニも候哉、右十左衛門押返、好雪様兵部殿方御早使ニ

家督ノ議

常長斷然
龜千代ノ
家督ヲ主
張ス

被遣、御家督之儀、入札を以可申上由、被仰越候、右十左衛門直々私宅
へ參、右之段申聞候間、我等挨拶ニハ、被仰下通致承知候、乍去 龜千代
様被成御座候上者、御家督誰と御疑ハ、有之間敷儀候、其段者御手前押
返不被得御意候哉と承候得者、無其儀由挨拶仕、行當申ニ付、我等申候
者、綱宗様御隠居奉願事後、御家無恙様ニ与存迄ニ候、又 綱宗様ニ之
忠儀ニ者、龜千代様守立申事迄之儀与存候、然處餘仁を御跡式被仰
立候而者、私躰迄無面目事候、縱御進退無御相違被 仰出候共、龜千
代様外ニ候ハ、餘人者兔も角も、私一類之者共、御門之地ふくを枕と
存詰候、其後者何分ニも御心次第ニ候、我等眼黒ク候内者、龜千代様ノ
外ニ者不罷成候、於我等入札ハ仕間敷候、入札仕候得者、御兩人様へ之
慮外候間、御手前へ咄ニ申候き、此趣具可被申上候、自餘之衆ノ者、入札
御取可有候、是程之一大事を、私式ニ被相尋迄も有之間敷と存候、然處
御手前役目柄と申、一應押返不被得御意候事ハ、仁躰ニ不似合由、以之

長江横尾
兩家ノ名
跡

外我等致腹立候、此段日本國中大小神以申通候、此時ノ十左衛門不和
ニ罷成、拙者所へ者暇乞なニ罷登候事、
一長江六郎死去之砌、三郎兵衛を跡職ニ相立申度与申上候品者、指渡之
從弟と申、其上三郎兵衛を長江主計養子ニ仕、後嗣申立候儀相濟候得
共、六郎出生仕候付而、實子を指置、養子ニ家督之願申上候儀、本意之外
と存、主計病死仕候節、右之品々我等願申上候付、六郎を家督被仰付候、
實者三郎兵衛儀主計家督之筈ニ御座候得共、我等弟之儀候故、右之通
申立候、然處長江之苗字者必無被相立、剩横尾之苗字被相禿之ニなら
次、私知行之内、以願被分下、横尾之苗字相續仕候、知行被召上候、其節
川島十郎跡式ハ、從弟ニ無御相違被 仰付候、川島之先祖、長江之先祖、
且又早川之先祖、奥山之先祖、私代迄露程も劣申間敷候、然處川島之名
跡ハ被相立、長江之名跡者右之通候間、命を限ニ訴訟申上度と存候得
共、大守様御誕生之刻ノ深存入罷在候處、身分之儀ニ而御恨ケ間敷事

常長二十
餘年惡人
同様ニ誤
解セラレ

申上候得者、年久存入候忠儀も空仕候儀口惜存、貳拾ヶ年余惡人同前
之身分ニ而罷在候、依之五六ヶ年以來出仙も不仕候、氣隨者之様ニ世
上ニ而も申之由候得共、右之仕合故、傍輩衆へも會顔申儀口惜存、不罷
出候、然處當夏分存之外御懇之御事共ニ而、難有奉存、跡を忘申仕合御
座候、右之通御奉公申上、又者迷惑候儀、子共ニも一言爲申聞候事、只今
迄者覺不申候得共、貴様頻依御望、無是非如斯候、御披見候ハ、火中被
成、他言被成間敷候、

常辰ハ綱
宗ノ隱居
願ニ加判
セズ
綱宗逼塞
品川ニ移
ル
龜千代ノ
家督相續

一吉岡九左衛門罷下ニ、江戸ニ相詰候老中、綱宗様御隱居申立候間、此
方之御一門衆始我等迄、加判可申由被仰下候、依之何後加判被申候
得共、一應達而綱宗様ノ御異見不被申上事、口惜存候間、遠山勘解由爲
相登、存分之通可申上由致挨拶、我等者加判不申候、無間勘解由爲相登
申候處、最早御逼塞ニ而、品川ノ御移被遊候付、空罷下候事、
一右之通ニ而、龜千代様へ御跡式無御相違、六拾万石被下之由被 仰

兩後見ノ
任命

六ヶ條ノ
儀

出旨、御早飛脚を以 好雪様兵部殿分被仰下、追而高泉長門被相下、此
旨御家中衆へ可申渡由被仰遣候、其節江戸詰被申候老中分之狀、兵部
殿隱岐殿へ御後見被 仰付、知行三万石宛被分下之由被申越候付、成
田助之允各務采女罷登、兩度 好雪様爲申登、御挨拶之趣、委細兩人
覺書爲仕受取置申候處、先年從 公方様御判物之御文言不宜儀、并久
喜御鷹場之事先達申上候刻、右覺書共ニ柴田内藏方迄爲相登申候間、
定而 御前ニ可有之候、御尋御覽可然候、扣者手前ニも有之候、
一六ヶ條之儀此間御尋候間、左ニ書付申候、
一相定候制札之事

吉利支丹札ノ各別之事

- 一 夫傳馬并宿送之事
- 一 大鷹 公方様へ被指上候事
- 一 初鳥初肴右同斷

一他國へ人返之事

一御境目通御判之事

右者、先達指上候覺書等ニ委細相見へ申候條、是又御尋候而御覽可有候
 且又右六ヶ條之儀、好雪様へ申上、雅樂頭殿へ被仰達候、則雅樂頭殿御
 宅へ拙者を被爲呼、御人拂ニ而被相尋候節、公方様に指上候物之儀者、
 其方心付書入候哉、又何方々も申遣候事有之候哉と、御尋被成候間、拙
 者一心ニ而書入申之由申上候得者、能そや書入候、先頃鴈を献上申度
 候き、如何可有之と、兵部が家來志賀又右衛門を以御申越候、我等挨拶
 ニハ、龜千代殿が御上候以後ニ候ハ、不苦候由、挨拶申候、其後鴈を獻
 上有之度由被申越候間、挨拶ニハ、鴈ハ鳥之以上ニ候、龜千代殿へ不
 劣献上ハ一切合點無之候、鴈をさへ如何と存候キ、追而鴈之儀者、必同
 心ニ無之と挨拶申候、此又衛門儀者、我等女共付置候者、近キ親類故、此
 者度々使ニ參候、能所へ心付、書加申候儀、一段之由被仰候、此趣者、雅樂

酒井忠清
六ヶ條ニ
ツキ常辰
ニ尋ヌ

常辰六ヶ
條申立ノ
スタメ出府

頭殿御隱^(密)蜜被仰聞之事候間、最前指上候覺書ニ者、相載不申候事、

一右六ヶ條爲可申立、寛文貳年六月十二日 御靈屋へ參詣仕、下宿支度
 申候得者、七ッ時罷成候、柴田外記へ立寄、我等申候者、此度六ヶ條之意
 趣申立度存罷登候、此段各初何後、同役中へ相談申事候得共、左様ニ仕
 候得者、首尾能相調候而も、御後見衆御心ニ違可申候、左候ハ、當時
 之御用難相叶候間、龜千代様御爲至而不可然候、我等一人ニ而も申
 立相叶候得者、無申事候、不相叶時ハ、二度御國へ可罷下覺悟無之、高野
 居住と相極罷登候、依之今日十二日ニ發足申候、此儀不相叶候ハ、跡
 ニ而何後^(批)批判、無相談罷登申上如斯之由、必可被申候、其時者右之趣、日
 頃御懇志之印ニ被仰分可預候、万一首尾能罷下候ハ、必御他言有間
 敷由申談候得者、外記挨拶無殘所いさきよく、誓言を以請合被申候故、
 致大慶罷立、漸中田迄參、致一宿罷登、江戸上着、六ヶ條之儀 好雪様に
 申上、雅樂頭殿迄被仰達、不相濟内 大守様御疱瘡被遊候、私之苦勞不

及申候、然處輕々御痘瘡御仕廻被遊、目出度御祝儀相調候上、六ヶ條之儀首尾能相濟、大慶仕罷下候事、

右之ヶ條、年久儀ニ而、前後不同可有之候得共、日本國中大小之神以虛言者無之候、證文無之儀共ニ候間、誓言を以如斯候、

一右之通、身を捨御奉公仕候處、兵部殿隱岐殿御心ニ懸引込申候得共、

大守様御成長被遊候ハ、被 思召分儀も可有之と存候處、如何相達御耳候哉、先年 御目見願、又ハ隱居願申上度存、延寶元年江戸ハ罷登

候節、鶉毛之馬爲土產獻上仕度と申上候得者、黒木上野見分被 仰付、

顔とて惡敷とて被相返候、 貞山様義山様御代、如何様之馬指上候連

後獻上之馬被相返候儀、覺無御座候間、少々江戸ハ致逗留、彼馬拂代金

高下を以、馬之善惡相達 御耳申度存候得共、 大守様御若年之御事、

畢竟者小梁川修理爲仕候事候間、如何と存罷下、仙臺日市ニ相出申候

處、無殘所馬之由御馬買衆被仰、六拾兩ニ御貫、松平加賀守殿ハ被遣候、

右之通之馬被相返、失面目申候事、

一我等隱居仕候刻、同名勘解由始子共三人共ニ爲相登申候處、右三人共

表ニ而 御目見被 仰付候、其前ニ古内志摩死去、繼目之爲御禮、左門

罷登候處、於 御座之間 御目見、御相伴迄被 仰付之由及承候、其節

者柴田内藏相詰被申由候、私子共罷登候已後、富塚内藏允死去、繼目之

爲御禮、長門罷登候處、於 御座之間 御目見被 仰付候、其節者大條

監物在番之由承候、内藏允志摩ニ私御奉公露程も劣申候ハ、只今逆

如何様ニ被 仰付候共、少も御恨奉存間敷候、志摩ハ原田甲斐死亡之

時分御旗本ニ而、以之外得惡名爲申者ニ候、内藏允ハ死去之時分檢使

被遣、死骸爲御見届爲被成程之事候、然處拙者子共計表ニ而 御目見、

近頃致迷惑候、其節者小梁川修理相詰申候間、兩度之迷惑打果申度程

ニ存候得共、 御爲如何と存暮候、拙者意趣無御座者も、身持之ため我

等を惡ミ申候得者、 御後見衆之御心ニ入申候故、 大守様御幼少之

時分、惡敷計相達 御耳候者共ハ、今迎^後申直ハ仕間敷候、手前ニも大形爲及承者も御座候、大守様ニ而も御覺被遊儀も可有之候、一兩度迄覺書相出申候處、御披見被遊、善惡之 御意無御座候、乍恐御心得^ニ可罷成と、委細申上候得共、右之仕合候事、

一 横尾之名跡申立候刻、御召出之訴訟申上候得共、證據無之由ニ而、御取上不被下、湯原横尾ハ御取上被遊候、横尾大學御座敷之御端ニも罷在候儀、無隱申唱、亡父大學横尾勘七と申時分、御召出罷出候得共、富塚内藏允さへ死去仕候故、右之仕合無是非存候事、

一 二之倉新田之儀、御後見衆よこへ^ハ之御仕置候得共、大守様御成長を相待候甲斐も無之候、此段も先年之覺書ニ申上候、附、今村才三郎石田十左衛門堀越源太左衛門儀、是又先年之書物ニ申上候得共、御取上不被下候、拙者誤ハ如何、三人共ニ少もあやまり無御座候得共、御後見衆我等を御惡故、右之仕合候、御先代之御事候ハ、被遊直儀、御遠慮も御尤至極奉存候得共、此儀者 御後見衆惡仕置之時分候間、當時被相直候儀可然様存候事、

一 兵部殿分も隱岐殿御心入惡敷儀共も候得共、御仕合能御跡職迄無御相違候、其節心入無然者共も、仕合能仁^後數多有之、心入能者も空敷打捨申者も有之候、人之仕合者、心入之善惡ニ不寄と見ハ申候、

一 引籠罷在候而も、御爲を存、千本兵左衛門殿水野與左衛門殿御下之節、以書狀申達、其後内藤出羽守殿牧野數馬殿御下向之節申達候品々、先年指上申候書物之内ニ相見ハ可申候、是又御覽可預候、拙者存付候程者、如形御爲之儀者疎略不仕^与存候、先年分法躰仕度存候得共、御仕置存通^ニも無御座候間、自然從 公儀御尋も御座候ハ、隱居之身分ニ候共罷出、御爲之儀者一言可申上と存、法躰致延引候、年若御座候ハ、一度御奉公可申上と存候處、悉老衰仕、年者口惜存候、其段者御推量可忝候、

常長茂庭
定元ノノ
權ヨリノ
宗ヲ誤リ
タリトノ
説

一乍次而書申候、内藤出羽守殿牧野數馬殿御下向之節、書物指出候衆御座候由、其書物ニ茂庭周防と我等威を爭候故、綱宗様を持損申候由書上候者及承候、全左様ニ者無之候、周防と我等、御奉公之心入各別之儀ニ候、此段者、其節御目付仕、存入深御奉公相勤申候間、白津一幽可存候、御聞御覽可有候、其上 綱宗様御下向之刻、拙者儀以外表裏仕ニ付、書物を以申分ケ仕候、其節入江左大夫各務采女御目付仕ニ付、右兩人を以入 御披見申候處、紙面之趣御披見被遊、申上ル所少も相違無之被聞召届候、重而其身事申上ル者有之候ハ、則可被仰聞候間、是を以役儀相勤申候様と、右兩人を以 御意御座候付、不快を不存御奉公仕候、其書物未所持仕候、左大夫死去申候共、因幡方覺可被申候、右之通故、我等引込申候時分者、周防と内々ハ不和御座候、

家督ノ後
補者

一不入事なうら存出候間書申候、先年小石川御普請之御様子も無御心元、第一者龜千代様奉拜度存、江戸へ罷登候處、兵部殿御咄ニ、御家督入

伊達宗敏
ハ宗勝ヲ
入札ス

札ニ様々之事有之、忠宗之御子ニ候間、右京殿式部殿可然と入札仕候者も有之、又兩人年長候ハ、左兵衛殿肥前殿可然と書出候者も有之候、我等事をも入候仁有之由御咄ニ候間、それハ誰う入申候哉と拙者申候得ハ、今程ハ不入事と被仰候き、左様候ハ、被仰出入御事候、被仰聞候上ハ、時過候儀成共、承度存之由申候得者、左候ハ、我等を入候者計御語り候半由ニ而、伊達彈正我等事を書出被申候、中々之事とて御笑被成、其外ハ何者入札仕候哉と申候得共、御咄無之候、入札ハ何後不殘仕由御咄、扱其方申分強過る事不及申候、されとも心之儘御家督相濟候上ハ、彌無油斷役儀相勤尤候由被仰候間、如御斷少も油斷不仕、尤身を捨御奉公可仕覺悟ニ候、乍去身之惡儀ハ不被存物候間、左様之儀御座候時ハ、成程御呵可被下候、又御心ニ障申儀申上候共、御堪忍可被成候、御手前様御事ニ候共、心ニ入不申儀者、申殘間敷由申留候得者、如何ニも尤之由被仰候、此段も前書誓言之通、少虚言無之候、

一筆之次而候間、綱宗様飛驒守様御自筆之趣書付申候、御本書ハ難有儀と、手前指置申候、

綱宗様御自筆之寫

一筆申遣候、然者其方事、前々々不うこういよさい無ほむれり共、可申様無之候、それニカ其身事ハ一やう志んニも候へハ、加そうをも早々とらせさく心入ニて候へ共、いま此折から、そんじゑんじよともをほく候ゆへ、此度相下り候ニモ、其儀無之候、それニ御いとほニて、國へも參候ハ、折うらを以申可付候間、心安可存候、其爲如此申入候、恐々謹言、

四月十二日

御諱御書判

奥山大學殿

飛驒守様御自筆之寫

龜千代殿御氣色彌能、夜中も食事快御進候由、珍重不過之候、殊更御顔

綱宗ヨリ
常辰ニ與
ヘシ書狀

立花忠茂
ヨリ常辰
ニ與ヘシ
書狀

之中少くくうせ候様見へ候間、明日時分湯をもうけ可申と、其許醫者衆申由、扱々安堵申事候、彌今日宗悦ハ可有御相談候、將又昨日左近御物語申通満足之由、得其意候、万事御手前御申付様宜故、物每作法無殘所と存、感入申候、龜千代殿御事大切ニ一筋ニ被存候故、心さく通今度も能時分在江戸、天道ニ御叶候と存候、大悦之段推量申候、我等共も大慶存事候、病中故、今度も其元ニ相詰不申、是のニ心外存候、重々吉左、右可申承候、恐々謹言、

九月廿三日

奥山大學殿

飛驒

此覺書、自筆叶不申候故、心安者ニ爲書、指遣申候、以上、

(貞享二年)

十一月十五日

奥山大炊
(常辰)

古内造酒祐様

此覺書、貞享貳年十二月十六日指遣之、

一九七九 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書) (封目) 封

瀨上淡路殿

松平陸奥守

打續雨天ニ御座候、御機嫌之御様躰無御心元奉存候、於其元御慰事之儀、先日以中山勘解由殿(直守カ)豊後守殿(阿部正武)へ申達候、勘解由殊外被入精頼上被申候、御老中御相談之由ニ御座候、何とそ相調候様ニと願申候、然ハ獻上物之儀、先日以佐藤杢瀨上淡路迄申上候、廿六日之夜ハ御法事始申候間、明日朝晚明後朝之内ニ伺申度候、白頭之儀拜領仕度奉存候、於此元尋申候、于今不參候、參候而も、其元ニ御座候ハれとり申候へハ、能を其元ニ御持被遊あうら、れとり候を獻上仕候儀ハ、獻上仕候ハぬよりハれとり申候間、被下間敷候ハ、白頭獻上之儀ハ相止申ニ而御座候、其元ニ御座候白頭ハ、勝候白頭ニ而、私在國仕候内、無隠頭ニ而御座候、

獻上物ニ就テノ相談

定而 上聞ニもごち、御老中(牧野成貞)備後守殿能被仕候衆ハ、被存候事必定ニ

御座候、私求可申と存候處ニ、今春ニ白頭用不申候故、次之道具ニ外不罷成候故、調不申候、公方様ニハ御用立申品ニ御座候故、今度尋申候へハ、淨眼院様被成御調候而、其元へ被進候由ニ御座候、わきニ御座候白頭、其元ニ御座候白頭ハれとり之段ハ、人々ニ脇カ參候をこせ申候へハ知レ申候、其元ニ御座候頭ハ勝レ申候と、諸人存知候而罷在候、右之通ニ御座候之上、今晚中ニも埒明申度儀ニ御座候間、可被遣共、被遣間敷とも、早々被仰出候様ニ奉願候、

一 繪硯御好ニ而、被仰付候由、承及候、御用立ら候物ニ候哉も不奉存儀ニ候へ共、公方様御繪を被遊候間、能獻上物々と奉存候、以前ニ而ハ定而繪硯御獻上ハ如何と被思召、先日も不仰下御儀と奉察候、繪硯上申候へ而、少も苦間敷と私ハ奉存候、彌御所持一度も不被成御用候ハ、白頭御繪硯兩様今晚被遣被下置候ハ、兩様之内いつきを上可申

と、明朝ニも伺申候へハ、殊外首尾能御座候、繪硯ハ拜見不仕候へハ、上可然もやうろ否相知不申候、何邊兩色共ニ、今晚被遣被下候様ニ奉願候、繪硯之儀ハ被御用立候物ニ候哉も難計候へ共、繪硯獻候とハ御氣付申間敷と奉存申上候、宜被申上候、以上、

(貞享三年カ)
卯月廿四日

松平陸奥守

瀬上淡路殿

一九八〇 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)
御請 (封目) (花押) (綱村)

瀬上淡路殿

松平陸奥守

兩通之御返書、追付以御使者御書、謹拜見仕候、先以 御機嫌不被成御替、恐悅仕候、乍去昨晚ハ 御氣色不被成御勝候由、無御心元奉存候、然ハ申上候物之儀被仰下、御意委細ニ奉承知候、延引仕候共、爰元ニ而才覺可仕

四代將軍
佛殿ノ修
復成ル

候、御書中任御意誰ニも爲見不申、則火中仕候、夜中さハかゝく候間、御請申上間敷御意ニ御座候得共、最早追付七ツ半ニ罷成候、今朝ハ 嚴有院様御佛殿御膳出來ニ付而、參府之衆段々參詣ニ付、最早仕舞申事御座候、其上爰元ニ而才覺仕候段、とくと可申上と、御請仕候、此旨宜被申上候、以上、

(貞享三年カ)
卯月廿五日

松平陸奥守

瀬上淡路殿

一九八一 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)
外之御用 (封目) (花押) (綱村)

瀬上淡路殿

松平陸奥守

別而申上候、今日ハ從上野罷歸、稽古能仕候、客と申候而も無御座候、不苦思召候ハ、熊谷喜六郎と見物被仰付可然奉存候、其外御近習衆御小

綱村替古
能ノ催

性衆ふと被遣可然奉存候、其元御慰事調可申歟之様ニ沙汰承候、于今濟不申候、濟申候へかゝと奉存候、無御心元可被思召と申上候、右沙汰少承筋候而承候、御老中方御口ふり之儀ニ候間、此手紙御火中可然奉存候、御老中ノ御中間ニ而つうへ候方候而、于今濟不申候哉、無心元奉存候、以上、

(貞享三年四月)

廿五日

陸奥守

淡路殿

一九八二 阿部正武覺書狀

覺

一白石城之外、家來衆被差置候城地之様ニ有之所、普請等御申付候刻、跡々ニ別條於無之者、修補御申付、其以後豊後守方ニ可被仰聞候、模様替候之けニ而候ハ、修補不被申付以前ニ、御届可然候、

白石城以下城地普請ノ手續

田村宗永居所普請ノ手續

綱宗能離ヲ聽サル

宗贊綱宗へ對面ヲ聽サル

一此以前家來衆被差置候中絶之城地ケ間敷所普請等之儀も、月番老中ニ一往御窺之上ニ而、可被御申付候、

一田村右京殿居所普請之儀者、居所者 公義よ_(宗永)御構無之候、併要害ケ

間敷事被申付候者、月番老中迄一往被相伺可然候、

一嘉心老手前之役者ニ而、能離御申付候事、自分之慰ニ者不苦候、親類中

かと被寄合候而之儀者、御遠慮可然候、

一伊達紀伊守殿嘉心老ニ對面之儀、壹年之内ニ兩度程被致對話可然候、

右各内談之上申進候、以上、

(貞享四年) 五月廿三日

阿部豊後守

松平陸奥守様

一九八三 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

五月廿八日(封目)

封

伊達家文書之五

瀬上淡路殿

松平陸奥守

謹言上仕候、益御機嫌好被成御座之旨、追々致承知、恐悅奉存候、然ハ御慰
 事之儀首尾好相濟、從豊後守殿被仰下候書付、寫候而指上申候、御悅奉察
 候、恐悅之段乍恐被遊御察可被下候、紀伊守御目見仕候儀、首尾好相濟、
 御満足奉察候、此段者其御地ニ而早速可被聞召奉存候、諸夏首尾好、大慶
 奉存候、急度御礼申上候儀ハ無用、豊後守殿へ可申達候、何處へ可被仰談
 由ニ付、其通仕儀ニ御座候、備後守殿へハ取前より之續ニ候故、書狀進
 事ニ御座候、取前被遊候御慰事ハ、此度之書付ニ而ハ、宜様ニ奉存候へ共、
 寂前ハ過申候様ニハ不可然奉存候、委細者、田中采女爲相登申候間、可申
 上候、采女道中急うせ候而ハ、目立申候故、ちと靜ニ罷登候様ニ可仕候、先
 早々可申上と、如此御座候、幸慰能仕罷在候時節故、將監始奉行共も寄合、
 祝慰申候、此等之趣宜被申上候、恐々謹言、

奈平陸奥守

伊達宗實
網宗ニ對
ルヲ聽サ

(貞享四年)
五月廿八日

瀬上淡路殿

網村(花押)

一九八四

萬壽寺

網村夫人
稻葉氏

消息

返く、きの守返よを、ひさくの御縁ういりあいら候て、品河返へ御
 いめん被成、さてくめてささ、さそ御まんそくの御事と、おあし御事悦ま
 いらせ候、おきよ殿も御道中御そくさいよて、六日よハうこ元へ御つき、
 御さいめんあされ候ハ、品河返御きんんの事、くましくきり努らま、御悦
 の御事と、めてさくそんら、ましくもそく災ニをりら、御心やすく
 覺しめし被成候へく候、と、

どみ流う長門うへう候ま、一筆申上り、今度御不つそくの御礼、志
 ゆひよく仰上らま、けん上物を志ゆひよく、長門事御めみ(志ゆひよくい
 んざれ、ましくの御礼まで申上らま、いつもの通、時ふくさいまやうの

宗實網宗
へノ對面
ヲ聽サル

清姫ノ仙
臺下向

網村發足
上ノ禮下
獻

事、うすくめてござ、何りうとく御同せんよそん、とくくへも、御をくろくの通下され、かこけあさ幾久くと祝入り、志こいニあつさニ成りへとも、いよく御機嫌よく御さあされ候よし、めてとく悦り、こもとうる事御さあく、品河^(綱宗)御きなんよく、泰應様よも御そく災ニ御さ候ま、御心やとく覺しめ、被成候へく候、めてとくト、

(貞享四年) 六月朔日

奥州様 八々御申

分 粉

一九八五 柴田宗意書狀

去月廿二日以御日付、御直筆御書被成下、昨日從栗村喜内方頂戴之、謹而奉拜見候、向甚暑候得共、御機嫌能被成御座之旨、追々奉承知、恐悦之至奉存候、於此方、屋形^(綱村)様益御機嫌能被成御座候、然者右廿二日御日柄能、御清様其御地被遊御發駕、御悦被思召之旨、乍憚御尤之御儀奉存候、道

清姫ノ下 向

中益御機嫌能、昨六日御當地御下着被遊候、目出度御儀奉存候、仍 御清様御事被 仰下趣、委細之 御書中、并喜内ニ被 仰付候御口上之通、奉承知、畏入奉存候、右之御儀、屋形様^ハ被 仰進候旨、奉得其 御意候、私所へ被 仰付趣をも、彌 屋形様へ申上、喜内罷登候節、追而委細可申上候、先御請爲可申上、如此御座候、將又私式之儀被成下 御尋、有難仕合、冥加至極奉存候、彼是以 御機嫌、宜被下御取成候、恐惶謹言、

柴田内藏

(貞享四年) 六月七日

宗意(花押)

瀬上淡路様

一九八六 伊達綱村書狀

勅使 院使 御對顔、御馳走之御能、勅答迄首尾好相濟候御悦、御老中迄申上候御序、謹奉言上候、益 御機嫌克被爲成御座之旨、追々致承

勅使院使 下向

知、恐悅奉存候、

清姫ノ下
向

一御清供被仰付栗村喜内被指下、御書喜内持參、謹奉拜見候、女共紀伊守妹共無事之段迄、御念比被仰下、忝仕合奉存候、然者御清被指下候、遠方剩江刺迄被遣候へハ、御清も一入殘多、於御前も別而御不便ニ被思召候得共、縁之儀ニ候へハ、不及是非被思召候、尙以心を添候様ニと、委細御念比ニ被成下御意、奉得其御意、難有奉存候、柴田内藏ニも可然様ニ可申付由、奉得其御意候、内藏ニも申付候、内藏方へも被成下御書、難有のり申候、御書拙者も拜見仕候、御端書之通も忝仕合奉存候、御きよも彌無異罷在候、今朝ハあふこへ參、不斷之料理可給と申付候、

一江刺ハ水澤へ程近ク候へ共、將監在府仕候へハ、難用立候、前澤三澤頼母方も程近ク有之ニ付、心を被添候様ニ頼可申由、頼母殿被居候處ニ而、局へ申候へハ、局も頼申候よ、頼母殿へ申候キ、諸支指圖ふと、申儀ハ、不可然奉存候、在所も近ク候へハ、何ぞ指當指圖被仕候、又ハ心

類姫母子
ニ祝儀ヲ
遣ハス

を添被申候ニハ、一段可然奉存候、不被仰付候共、指當候義ハ延慮も有之間敷、う候へとも、とかくハ延慮の方ニも可有之候、在所も近ク候間、心を添可被申由、從御前も被仰下候様ニ可然うと奉存候、さやうニ御座候而も、常々之事ふと指圖被仕事ニハ有之間敷候、何ぞ煩等之時、産ふと、も申候、火事其外ニ付而も、可然儀と奉存候、

一去月廿九日之御日付御端書、御自筆之御返書、謹拜見仕候、御類老母へ祝儀遣之候處ニ、達御耳、御滿悅之旨被仰下、忝仕合奉存候、御類母子共ニ御礼被仰下度申上候由、被仰下、忝御事奉存候、彌御類卯之吉無異之由、追々承、大慶仕候、

一當月二日之御日付御端書、御自筆之御返書、謹拜見仕候、御清道中へ鯨遣候へハ、御前へ指上、御礼之段被仰下度之旨申上候由、將又御類へ音信仕候處ニ、御悅之旨被仰下、難有奉存候、

一當地無別條、私并弟妹無異罷在候、ひとすら雨ニ而、暑氣ニ無之候、昨晝

一九八八 阿部正武書狀寫

猶々、殘暑之刻、御堅固御休息被成珍重之御事候、示預候段、被入御念御事候、以上、

貴札令拜見候、公方様益御機嫌能被成御座、恐悅思召旨、尤之御事候、將又嘉心老慰能儀、寢前被相窺候時分、各申談、能嚙子御申付候様ニ申達候間、笛太鼓共苦ケ間敷候間、左様御心得可被成候、如仰私義無異事致勤仕候、恐惶謹言、

綱宗能嚙
ヲニ笛太鼓
許サル

(貞享四年)

七月十一日

阿部豊後守(正武)

松平陸奥守様
御報

一九八九 伊達綱村書狀

謹奉言上候、益御機嫌能被成御座、恐悅奉存候、然ハ御慰事之儀申達

候、豊後守殿返答今朝到來仕候、寫候而指上申候、首尾好相濟、扱々恐悅仕候、態以飛脚可申上候へとも、當年ハ殊外飛脚多有之候ニ付、幸今日白川半太夫平産用ニ而、急爲相登候儀ニ候故、序ニ御座候得共、半太夫ニ指上申候、

一十三日之御日付ニ而以御自筆、御慰之儀ニ付、御用被仰下候御書、今朝謹奉拜見候、御意之趣奉心得候、平産以後、祝儀能興行仕候ニ付、役者ハ指上兼可申候條、侍共之内、何とそうつくも御用立候程、爲相登可申候、御請ハ追而可申上候得共、先急申上候、

一不入申上事ニ候へ共、中村善兵衛儀罷登候處ニ、御目見被仰付、御意被成下、殊外有難う申聞候、

一當地無別條、私初無事罷在候、十五日祝儀料理以後、祝候而能興行仕候、七ツ半比始り、夜五ツ半比濟申候、能組指上申候、去七日之能組も、指上申候、

綱村燈籠
ヲ見物ス

一十六日晚(伊達基貞)數馬方へ料理振舞、將監大藏兵庫相伴ニ而祝申候、十六日ハ
天氣惡候處ニ、暮前より少々雨止候故、暮過本丸へ上り、燈籠見物仕候
處、又々雨降申候へとも、燈籠之火消申候程ニハ無之候、五つ過雨止、町
通いさし、燈籠見物、四つ過歸城仕候、其以後之様子ハ、追而可申上候、
此等之趣宜被申上候、恐々謹言、

松平陸奥守

(貞享四年)
七月十八日

綱村(花押)

瀨上淡路殿

一九九〇 仁讓院綱宗女 清姬 消息

綱村浦谷
ニ行ク

まつ申上候ハんヲ、むといき、且きやへもあらせられ、おぼいとこのニをひさ
くにて御めニへ申上り、せられ、うの吉とのにて御めニへ申さま、御
めてさく御いじいあそハ候ハんと、御めてさくそんし上り、うつま

のよても、ちとむやうき小御さ候よし、たんく氣色もよく、こん日こゝも
とへ御つきめてさくいじ井ら御事ニ御さ候、且さくも、いよくそく
才りおりら、ま、御はいてニ、御心やまき覺しめさせられ候やうニ、よく
く仰上られ下され候へく候、めてさくト、

かつまとのより御志しや上り、せられ候由うけ給、一筆申上りいらせ
候、まつく、御まさ様御きなん様の御事うけ給さくぞんし上り、む
といき、あう志まつへ御たう野よあらせられ、御機嫌様御よく御あくさ
そあそハ候御事うけ給、誠よく御目出さくそんし上り、御歸あそ
ハ候ても、いよく御機嫌様御よくあらせられ候や、あけ給さき、殊小
くひといハ、御たうのこそつくと 御意あそハ、むそり一れけいこ
き、有うさくそんし上り、うこ御不と、志やうなん様御きなんよく、む
やうこ殿大くらとのにて、彌々御そくさいの御事うけ給、うさく御
目出さくそんし上り、めてさくト、

綱村高清
水へ鷹狩
ニ出ツ

(貞享四年)

八月三日

方

内藏殿
御披露

清

一九九一 伊達綱村書狀

猶々被仰下候御用、具奉承知候、御きら當年三度可被爲呼之旨、御指支御座有間敷と吟味仕候、委細ハ奉行共可申上候、宜被申上候、以上、

益之御祝儀申上候御返書、御自筆頂戴、忝仕合、謹致拜見候、益 御機嫌能

御祝被遊候之旨被仰下、恐悅之至奉存候、何_後無事之由被仰下、忝仕合、大

慶奉存候、然者越_(吉村)前守 御機嫌伺參上仕候儀被仰下候、承知仕、乍憚一段

之御更奉存候、將又、御きら參上仕候儀ニ付而、委細被仰下、奉承知候、奉行

共ニ爲申聞候、奉行共方々申上候様よと申付候、爰許無別條、拙者無事罷

在候、此間少々疝氣、乍憚腹相惡敷、指當用事等ハ相足候へ共、一日々々と

吉村下綺
羅姫ノ綱
宗訪問

延引、唯今御受申上候、大形快候得共、于今常之通よ_も無御座候、尤臥候而罷在之義よてハ、始より無之候、此等之趣宜被申上候、恐々謹言、

松平陸奥守

(貞享四年)
八月十三日

綱村(花押)

高泉筑後殿

一九九二 伊達宗元先祖由緒書上

(端裏書)

貞享_(改元元祿元年也)五年九月九日伊達安藝殿宗元ヨリ先祖之事書上

一御奉書ニ、中野常陸謀叛者四月五日ニ而、米澤御城下屋敷_ハ火を懸、

御城計殘、悉焼拂、信夫郡大森_ハ引退、自夫會津_ハ致出奔由ニ候、拙者家

譜ニ、中野常陸相馬ニ出奔_ハ御座候付、御尋被遊候、此段内藤閑齋ニ

承候所、成程相馬_ハ參、一兩年_も令逗留、於相馬御馳走ニ而罷在候處、遠

藤山城計略を以、相馬_も無首尾ニ罷成、其後會津_ハ參候様ニ、古内主膳

中野常陸
ノ謀反

巨理氏伊達氏ニ屬ス

田母神榮心物語具ニ承候由ニ而、寂前家譜ニ相載申候、大森ニ引退、自夫相馬ニ出奔仕、後會津ニ罷越候方ニ而可有之ニ奉存候、閑齋も私同前ニ奉存候由申事候、右之通ニ御座候得者、宮河原ニ而之合戰、道筋相應之由、閑齋申候、元宗父子在所曰理(巨)人數召連罷出候段、拙者も相應奉存候、万一信夫郡大佛邊淺川戰とほりひ、取違候儀も御座候哉と被 思召之由、御尤ニ奉存候得共、淺川戰とハ別條之様ニ奉存候、乍去淺川戰ハ、相馬之兵敗軍仕候得ハ、武功も寂前ニ拔群ニ候條、此節御加増拜領仕事も難計候得共、前々々承覺次第ニ、家譜ニ相載申候、

一曰理郡、宗遠様之御代ニ御手ニ入、其時分ハ御旗本ニ罷成候半ニ被 思召之由、當時曰理系圖相綴候處、拙者先祖曰理肥前守行胤と申者御座候、于時永徳元年秋、宗遠様苅田表ニ御出馬被成候而、曰理ニ被爲向候、其砌曰理之兵悉敗軍仕、御手ニ入申由ニ而、其段系圖相見得申候、其後再興仕候と相見得、右行胤ハ八代目曰理右近太夫宗元と申者

巨理ノ兩家

巨理元宗

之代ニ、又候哉御旗本ニ罷成由ニ御座候、

一曰理美濃重宗ニ御氏不被下、右近定宗ニ御氏被下候付、曰理をハ別家ニ、御一家を被相立候と申説御座候由、右近定宗儀も、先祖之通曰理を名乗、於 御家ハ、御一門之列ニ而罷有候所、慶長十一年 貞山様御息女様 上總助忠輝公ニ御祝言之刻、台徳院様ニ御目見得之節、別氏を以御一門如何と被 思召、伊達之御氏被成下由候、別家ニ御一家被相立候儀ニ無御座候、曰理伯耆曰理を名乗申儀、美濃重宗隱居分ニ別地致拜領候娘御座候ニ、慶長九年茂庭石見二男伯耆取合、曰理氏相出爲名乗申候所、從 貞山様宗之 御一字被下、御一家之内ニ被相加候、

一曰理兵庫元宗事 植宗様御息男、老躰旁以上座おとハ仕候得共、御一門ニ者追而罷成候哉と被 思召之由、曰理兵庫宗隆、從先祖累代曰理ニ居住仕候所、宗隆男子無御座、植宗様御息男兵庫元宗致養子、曰理

之家を令相續候得共、先祖各々ニ御座候故、此時迄曰理之例儀相殘、京都將軍義輝公ニ御目見得仕候、自然ニ御家中ニ罷成候得共、右之由緒を以、於御家ハ、元宗重宗歴々上座仕候由承候、先祖々御一家と申事不承傳候

一古キ物ニ、懸田殿知行分曰理殿知行分と有之候得ハ、久敷御家中之様ニ被思召之由、其段如何様之儀ニ御座候哉、不承傳候、拙者先祖、近比迄御旗下ニ罷成候と申事御座候得ハ、久敷御家中とハ不奉存候、以上、

伊達安藝

(元祿元年)
九月九日

宗元(花押)

一九九三 稻葉正則書狀案

(定長)
梶左兵衛佐殿ニ之案詞

別紙致啓上候、于今寒氣甚御座候、貴様御無事ニ被成御勤候哉、承度存候、

綱村日光
普請ノ手
傳ヲ命ゼ
ラル

正則茶栗
ヲ梶定長
ニ贈ル

其後者以書狀も不得御意、御物遠存候、當春ハ當地近年之寒氣ニ御座候、御山察入存候、將又兩御山御造營ニ付、御普請御手傳之儀、松平陸奥守ハ被仰付、所柄と申、難有ウマニ而御座候、未御修復ニ而候哉、新造ニ而御座候哉、仰出ハ無御座候、新造ニ候ハ、來年中懸リ可申由ニ御座候、御修復ニ而有之度儀と下ニ而者願申旨ニ御座候、次拙者替儀無之存命罷在候、可御心安候、隨而書中之印計ニ、御茶一箱うち栗一箱致進覽候、猶期永日之時候、恐惶謹言、

(元祿二年)
正月廿三日

一九九四 梶定長書狀寫

猶以早々御使者被遣度思召候得共、御門主爰元ニ御座候内ハ、御延引被遊之旨、御尤奉存候、陸奥守殿御家來衆大勢可被參候間、存寄之儀者可申談由、奉得其意候、折々被參候間、存寄之義ハ、少後遠慮不仕申談候、以上、

綱村ノ日
光普請手
傳

御別紙忝奉拜見候、未寒氣甚御座候得共、貴殿様愈御堅固被成御座之由、目出度奉存候、如仰下候、其後者以書狀も不申上、御無音罷過候、其御地者近年之寒氣ニ御座候由、御當山も寒氣強御座候、將亦爰許 兩御山御造營付而、御普請之儀松平陸奥守殿へ御手傳被 仰付、所柄と申、難有被思召之由、乍憚御尤奉存候、未御修復ニ而御座候哉、御新造ニ而御座候哉、仰出無御座、御新造ニ御座候者、來年中御懸り可被成由、御修復有之度と御願御座候旨、被聞召候由、御尤奉存候、隨而御茶一箱搗栗一箱被掛御意、忝次第奉存候、遠路と申、被掛御心之段、忝仕合奉存候、委細者御使者可被申上候、恐惶謹言、

梶左兵衛佐

(元祿二年)
正月廿六日

稻泰應様
參尊報

一九九五 稻葉正則書狀

先刻者御使者忝存候、然者日光へ遣候使者、今日罷歸候、梶左兵衛之ニ通、懸御目申候、此方分申入候と、少あや違候所御座候故、下書相添、懸御目申候、則三通共、御割捨可被下候、如何様、來月不斗御内證へ致參上、可得貴意候、以上、

(元祿二年)
正月廿八日

稻葉泰應

松陸奥守様

一九九六 伊達綱村書狀案

御手紙拜見仕候、梶左兵衛佐殿へ被遣候返事參候ニ付、被成爲御見候、此方分被仰遣候と、少あや違候所御座候故、御下書被相添被成爲御見候由、委細承知仕候、御下書、あふこ分參候返事、一々致拜見候、御修復ニ而御座候哉、新造ニ而御座候哉、仰出無御座候、新造ニ而御座候ハ、來年中

日光普請
手傳ノ事
ニ就キ網
村ノ迷惑

懸り可申由ニ御座候、御修復ニ而有之度義と、下ニ而ハ願申旨ニ御座候由、被仰遣候處ニ、御修復有之度ニ御願ニ御座候旨、被聞召候由、違却御座候而ハ、私近比迷惑仕候、不入事被仰遣、あや違罷出、憚らうら少々御うら
 ミニ奉存候、御勘當そ、なふに御修復ニ而有之度と願可申候、下之者共ハ何と奉存候哉、其段ハ私不奉存候、貴公ハ被仰遣候御心ハ、世間下之者之申事を被仰遣候義トハ合點仕候（共、あや違罷成、痛入めいよく仕候、左兵衛佐殿ハ私方ハ可申分様ハ無御座候間、追而被仰遣可被下候、奉頼候、とやうく申上、貴公之思召ハ不苦候得共、左兵衛殿不入申事と可思召哉と、其程もめいよく仕候（共、此分ニ而者、不大形難儀ニ奉存候間、如此申上候、其元ハ御狀被遣候御便も無御座候ハ、拙者方ハ度々便御座候間、此方ハ被遣候ハ、指越可申候、憚入候得共、殊外痛入申候ニ付、如此御座候、以上、

（元祿二年）
 正月廿八日

泰應様

猶々、三通返上之仕候、以上、

一九九七 稻葉正則書狀

（端裏ウハ書）

松平陸奥守様

稻葉泰應

尙々、世上之さゝ申入候事、思召承候（バ、不入事申遣、致迷惑候、乍去御心ニ無御座儀者、何事申候て、外之儀ニ而之申事ニ御座候、以上、
 返々、下書ノ書狀明日調、家老衆迄頼ミ可遣と存候、以上、

先刻之御報并三通御返、請取申候、就夫貴様思召ニ無之儀申遣、御氣之毒ニ思召候、左兵衛殿（梶定良）貴様ハ可被仰入様者無御座候、私方ハ申遣候之様ニと思召旨、承知仕候、世上おこな（申儀ニ而候（ハ、私者左兵衛心安候故、申遣候（共、貴様思召を申遣候様ニ被存候（者、如何敷候間、私方ハ左兵衛殿（、重而右之け可申遣旨、被仰聞候、則左兵衛殿（之書狀之致下書、

網村正則
 ニ梶定良
 ハノ辨解
 ヲ依頼ス

懸御目候、思召御座候ハ、可被仰下候、以上、

(元祿二年)

正月廿八日

一九九八 稻葉正則書狀案

梶左兵衛殿へ書狀下書

乍御報、去廿六日之御日付ニ而兩通之御狀、忝致拜見候、先以 御山御安
全之旨、恐悅ニ奉存候、御佛殿へ献上之御菓子被相備被下旨、忝奉存候、
貴様御無事御勤、珍重存候、然者其元御普請之儀ニ付、世上下々之沙汰申
入候處、御修復願候様ニ思召候御報ニ而御座候、日本之神陸奥守毛頭願
之儀不承候、其上未とかく之儀不被 仰出候ハ、願可有之様無御座候、
若願有之様ニ思召候ハ、陸奥守迷惑可被致と存、如此御座候、御聞捨ニ
可被成候、以飛札可申入候得共、事ケ間敷候間、便ニ申入事ニ而御座候、猶
重而可得御意候、恐惶謹言、

正則殿ニ日光
佛子ノ獻ズ
梶村ノ良綱
修復願ハ由
出セルヲ光
ヲ報ズル由
正則ノ網村
ノ爲ニツ
辨無實ヲ

(元祿二年)
正月廿八日

一九九九 伊達綱村書狀案

先刻之御再答拜見仕候、追而左兵衛佐殿へ被仰遣可被下由、御案文被下、
拜見仕候、忝仕合ニ奉存候、以上、

(元祿二年正月)

廿八日

泰應様

猶々存寄候ハ、可申上由、被仰下候、同者、之仕候分被相除候ハ、可然
御座候半哉と奉存候、以上、

二〇〇〇 梶定良書狀

猶以其御地者于今寒氣強御座候由、御當山も未殊之外寒申候、返々御修覆
ニ下々願申候由、被仰下候御報ニ、御願之由を申上候御字、書誤り付申候故、

御不番之立申候儀御尤奉存候、以上

先月廿九日之尊書、忝奉拜見候、先以貴殿様愈御堅固被成御座之由、珍重奉存候、御當山御安全之御事御座候、先日 御佛殿に以御使者御菓子御献上被遊候處、奉備候儀被聞召之旨、奉得其意候、然者爰許御普請之儀に付、世上下々之沙汰被仰下候處、陸奥守殿御修覆御願候様ニ御報申上候由、被仰下候、乍憚日本神陸奥守殿御修覆御願候と者承知不仕候、筆者之誤ニ而迷惑奉存候、恐惶謹言、

正則日光
佛殿ニ菓
子ヲ獻ズ
定長筆者
スノ誤ヲ謝

梶左兵衛佐

(元祿二年)
閏正月三日

定長(花押)

稻泰應様

參尊報

11001 德川綱吉黒印條目

(折封ウハ書)

松平陸奥守殿

日光修復
ノ條目

條々

一 今度日光山修復中、不依何事申分有之者、造畢之上可沙汰、縱雖有道理、申出輩可爲曲事、

喧嘩口論
ハ兩成敗
荷擔者ハ
本人ヨリ
モ重科

一 喧嘩口論堅制禁之訖、若有違犯之族者、不論理非、双方可處斬罪、勿論令荷擔者、其咎可重於本人、萬一喧嘩口論火事有之時、役人之外、一切其所に不可馳集事、

押買狼藉
ノ禁

附、不可押買狼藉事、

一人返ノ停
止

一人返之儀停止之、於有申趣者、造畢之上可及沙汰、但重科人者達井伊掃部頭、可受裁許、不可致私之出入事、

右條々堅可相守之者也、

元祿二年二月十六日

(綱吉黒印)
○印文ニ綱吉トアリ、

松平陸奥守殿

二〇〇二 萬壽寺網村夫人 稻葉氏 消息

返く、御きなんよく御つとめの御事と、うすくめてさく祝入り、とと、
八朔比めあきさいと井入り、いよく御機をんよく御をう御つとめ
あされ候はんや、一しめてさくそんし、品川(網宗)も御き嫌よく、泰
應御そくさい御さ候ま、御心やをく覺しめ、被成候へく候、こん
日の御志うあわざと祝りして、此御もくろくのとく御めようけり、や
さうちまたあきちのよて御さ候ま、ねさと御めようけり、私もふ
しをり、御心やをく覺しめ、被成候へく候、めてさくとと、

(元祿二年)
八月朔日

奥州
人々御申

粉

八朔ノ祝儀

類姫出府
ニシテ綱宗
ニ對面ス

二〇〇三 安壽院綱宗側室 黒江氏 消息

あはく、御はいてのおりぬ、右の御礼、よはしく仰あけられ可被下候、頼
入り、めてさくとと、

御礼申あけさ、御てまへ迄一筆申入り、この度御お舟様御のり
被成、大殿様御機嫌よく御對免、被遊候御祝儀と、御意あそをされ、
(網村)屋形様御使者にて、御をく録のと依り、御さうあさいとやう致、誠ニ
ほりうとく御めあ度いと、きあけり、御ついての折ふ、よはしく御
とりあ、仰上ら可被下候、屋うと様まをく御きあん御よく御さ
あさせられ候由、大そまをうら御めてさくそん、上り、めてさくとと、

(元祿四年カ)
三月廿五日

せしもと
やうぬ

をさ

二〇〇四 伊達綱村書狀案

網村夫人
桂昌院ニ
内講ヲ聽
サル

以手紙言上仕候、彌御機嫌能為成御座候之旨、追々致承知、恐悅奉存候、
然者女共方より(桂昌院)三之御丸様御機嫌伺申義、六角越前守殿御取持ニ而、
御内々ニ而越前守殿迄、御機嫌伺申答ニ罷成、今朝御蠟燭御看差上申
候、此段從女共方可申上候得共、拙者委細可申上と申、差扣申候、御内々之
御事ニ而、手前ニ而も事廣ク不仕義ニ御座候、誰へも御沙汰不被遊、被聞
召候迄ニ被遊、女共方へ御悅被仰下候共、六角越前守殿分御念比之義ニ
而、首尾好目出度被思召候と迄、被仰下候様ニ仕度奉存候、此等之趣宜被
申上候、已上、

(元祿四年)

十月朔日

高泉筑後殿

猶々、表向と急度、御機嫌伺申義ハ、御一門方之外無御座候由、皆々御内證々
之義と相見え申候、定而御老中方とハ被存間敷候、女共義ハ、春日殿首尾
故之義ニ而御座候、以上、

表向ノ機
嫌伺ハ御
一門ニ限
ル

二〇〇五 柴田宗意外二名連署起請文

○コノ起請文、神文以下ハ、熊野牛王寶印ノ裏ヲ反シテ書セリ、

起請文前書

一 申上候主意別意無之、御為第一と奉存候事、
一同役三人之内別紙ニ申上候義ハ、少品違申候故、別紙ニ申上候、主意違
申候歟、且又相牙ニ別心有之候而之夏ニ者無之候、勿論何方ヲ被相用
候共、相牙ニ殘心無之候事、

於違犯仕者

梵天帝釋四大天王、惣日本國中六十餘州大小之神祇、殊鹽竈大明神伊豆
宮根兩所權現三島大明神八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷屬神罰冥
罰、各可罷蒙者也、仍起請文如件、

佐々豐前

元祿五年正月二十七日

定隆 (花押血判)

津田民部

春康 (花押血判)

柴田内藏

宗意 (花押血判)

二〇〇六 伊達綱村書狀

謹致言上候、土用以後以之外之暑氣御座候、其御地奉察候、御機嫌能
被爲成御座之旨、追々承知仕、恐悅奉存候、猶更御様子奉伺度奉存候、爰
元無別條、拙者始無事罷在候、中村左衛門 御目見迄申上、難有仕合奉
存候、十日着、十一日對面仕候、左衛門罷下之節、御返書被下、御念比
被仰下、忝仕合奉存候、御自筆之御端書、重々忝次第奉存候、左衛門儀難
有被思召之段、御尤之御儀、如御意、左衛門一分ニも難有冥加之仕合御

座候、左衛門 御目見以後罷出、御目見被仰付、御料理被下、御饗應之由
被仰下候、珍重奉存候、罷下則申聞、拜領物も被仰付候由申聞候、忝う
申候、右十一日安藝殿へ馳走之能興行之砌、幸よ存、左衛門義何_後へ能
興行之砌、其御地へ罷登候ニ付、料理も振舞、能爲見申候、
一左衛門内證へ十三日之朝振舞ニ參、緩々祝申候、成程機嫌能、顔色も宜
食事も快被下事ニ御座候、

一御るい事、來ル十八日發足之筈ニ被仰付候由、珍重奉存候、乍去御殘多
可被思召と奉存候、甚暑之節、道中難儀可仕と奉存候、然者安藝殿御る
い下着之砌ハ可被致參府存念ニ付、江戸ニ拙者罷在候内申上候通、永
々在江戸、日光も被相務、知行水損、在所火事、旁休息も被仕候之様ニと
存候ニ付、兵庫被罷在候間、在所よ之被待請候様ニと申付候、

一若林下屋敷取立申候ニ付、節々罷越候故、鷹野ニも未罷出不申候、尤奉
行共用等申談、殊當月ハ諸願申付候月よて御座候故、隙無之、若林へ計

類姫ノ江
戸發足

若林下屋
敷ノ普請

罷越事ニ御座候、神事も當月ハ多、一入鷹狩障申候、廿日過ならてハ罷出間敷候、

一御るい事ニ付、發足前御直ニ被相渡候御書付之義、奉行共相談仕候別紙ニ申上候、此等之趣宜被申上候、恐々謹言、

松平陸奥守

(元祿五年)
六月十三日

綱村(花押)

高泉筑後殿

11007 伊達綱村覺書狀

覺

拙者發足前御暇乞罷出候時分、御直被相渡候御書付、奉行共相談仕候、御やな甥之儀、拙者惡敷合点仕候而、足輕類之者よて御座候と存罷在候、古内源吉家來、仙臺留守居仕候者ニ御座候ハ、少も指支御座有間

類姫母方ノ取立

類姫ハ合力

敷と吟味仕候、若々安藝殿不快被存候ハ、如何ニ御座候ニ付、豊前ニ内證申させ、ウヤウ之あといニ而候、助右衛門儀最前不調法之願出候由、不被存分よて濟申候由ニ候、ウヤウ之事よて不快被存候哉、大形之儀ニ候ハ、其通ニ被仕可然と存候趣申させ候ハ、安藝殿ニハ却而忝被存候、手前ニ置候而、不調法之儀も仕候ハ、見此ウよくき事も可有之哉とも被存候ハ、忝大慶被仕趣ニ候、然者今度御るい下着以後、此砌ニ可申付と奉存候、彌以最前豊前申上候哉、一僕二僕よてハ却而不可然存候、知行百石申付、大番組ハ番入可申付候、番所之儀、家中者ニハ御座候ハ共、御るい母方之事ニ候ハ、次之間ハ苦間敷と奉存候、

一御るいハ合力之儀、此段ハ御きよハ小身成方ハ參候ハ共、思召次第之義ニ御座候ハ、指支申御事ニハ御座有間敷奉存候、其上安藝殿方ハ心付よ成可申と存候ハ、江戸ハ度々被相登御事ニ候ハ、何程安

藝殿物入無之様ニと御座候而も、兎角ハ物入可有之候ヘハ、猶以之事
 ニ御座候、乍去江戸ニ拙者罷在候内、御耳ニ立申候通、當年ハ勝手指配
 大事之年、二三年大切ニ御座候、御ち多祝言來年も可罷成トハ、御請申
 上よくきあそいふトニ御座候而、諸事せいふ吟味仕事ニ御座候、此
 節ハ如何ニ奉存候、今度御るい罷下候時節ト申、第一當年分志きせ遣
 不申候年、旁時節ニ御座候ヘ共、右之通ニ御座候間、先以三四年ハ被相
 延候様ニ申上度候、少分之儀ニ候ヘ共、りやう之義數はを可申候而、間
 ニ合不申候、一ヶ年之出方大分過申候ニ付、中々何様ニ仕候而も、間ニ
 合兼可申候、何とそ間ニ合候様ニと指配申事ニ御座候、然者志きせ之
 義、先以當分之通遣申候ト、御るい下着、脇谷ヘ罷越候時分よても、相濟
 可然御座候半ト、相談仕候、奉行共思召ニさそ可申哉ト、延慮ニ奉存
 候ヘ共、未迄罷成間敷ト申上事ニも無御座、又右之品々大切之義ニ御
 座候、且又それニ構申御事ニハ無御座候ヘ共、御やな甥之義、寂前被思

召候よりハ、何之事もなく相濟申候ヘハ、旁延慮不仕申上可然ト、拙者
 申候、右之通ニ御座候間、先以三四年ハ、當分之通志きせニ被遊、御待被
 遊候之様ニと奉存候

此等之趣宜被申上候、以上、

(元祿五年)
六月十三日

松平陸奥守

高泉筑後殿

猶々、御書付之趣奉承知候而ハ猶以各別之事、少分之義何之滞も無御座義
 ニ御座候ヘ共、夫共ニ一兩年指く可大切ニ御座候ヘハ、本之く可合違申候
 ヘハ、何を申候而もせんあき事ニ御座候間、延慮ニ奉存候ヘ共、御待被遊候
 様ニ申上候、以上、

二〇〇八 伊達綱村書狀

別而申上候、御るいハ合力之義御待被遊候様ト申上、外ニ少々物入之

類姫()
合力

若林下屋敷ノ取立

義共有之候へハ、これをハ申付、御るい合力之義ハ御待被遊候様ニと申上候と可被思召歟、若林下屋敷取立之義者、第一日々鷹狩仕候事遠慮ニ御座候へハ、若鷹取飼之砌、殊外難儀仕、將又鷹之時分迷惑仕候ニ付、二三年以前よ取立可申と存候（共、鐵炮藥置所ちのく、其上調合場之隣ニ而、あやうく御座候故延引、今度右鉄炮藥置所方々へうつ候事、（阿部正武）豊後守殿へ得内意、相濟申候ニ付、取立申候、次ニハ下屋敷ニ逗留仕候へハ、とまじを數少罷成、上下勝手、又ハ右滞留之内、少ハ勝手之方ニ罷成じけも御座候、將又東昌寺長老成少分なから、光明寺秉拂西堂成之義ハ、公儀御判相調候義ニ而、五六年ニ一度も取上仕兼、一度御序をそつれ申候へハ、殊外延引仕候、七八年之内、光明寺殿四百五十年忌、東昌寺殿三百五十年忌相當候故、旁如此よて御座候、御次而ニ可被申上候、以上、

（元祿五年六月）

十三日

陸奥守

筑後殿

長老成西堂成

二〇〇九 伊達綱村判形狀

（包帯ウハ書）

元祿九年二月廿九日御拜領

太守様御自筆之御判



此きよよて、様子思召次第ニ被成可然存候、以上、

二〇一〇 伊達綱村書狀

（糊封ウハ書）

藤次郎殿

中將

品川様御機嫌能、恐悅奉存候、奥方貴殿無異、悅申候、猶以様子承度候、我等首尾好御暇歸國、殊旧冬難有儀共ニ而、一入恐悅仕候、雨後晴、暮能候而、快旅行、五ツ比至越谷驛着候、可御心安候、以松元縫殿兩種給、令祝着候、

綱村歸國

綱村吉村ノタメニ花押ヲ案ズ

追々可申入候、無程參府、品川様へ御目見、奥方貴殿へも逢可申と、祝入申事候、恐々謹言、

中將

(綱村)

(花押)

(元祿九年)

四月廿五日

(吉村)

藤次郎殿

二〇一一 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

藤次郎殿

左中將

猶々、領内へ入、悦候以上、

一筆申入候、品川様御機嫌能被爲成御座之旨、追々承、恐悦、奥方貴殿御無事之由、大慶存候、吾等彌無異、今朝四ツ前福島發駕、九ツ半前藤田着、昼休、八ツ前發駕、七ツ半時白石城着、祝申事候、片倉三之介響應候、伊達

綱村歸國

若狹殿被相越對面、悦申候、明日者可致着城、大慶存候、品川へ飛脚指上候間、如此候、遠江守殿美作守殿へも可被相通候、右京太夫殿へも傳言申度候、恐々謹言、

左中將

(元祿九年)

五月二日

綱村

藤次郎殿

二〇一二 萬壽寺 綱村夫人 稻葉氏 消息

返く、藤二郎殿風け、そやく心よく、さてくめてとさうれしく存り、さそ御心もとあく覺しめし候いと、そんなら、めてさくも、一筆申あけり、いよく御機嫌よく御さかされ候はんや、めあさくそんなら、こもと品川^(マ)御さかされ候、藤二郎殿かせ色、存よく心よく御さ候ま、御心やすく覺しめし候へく候、わさくーー不

稻葉正則
吉村ノ風
邪ヲ見舞
網村夫人
桂昌院ヨ
ヲリ榿木重
ヲ拜領ス

御うきく悦なり、きい應様よも、きのふ御見まいあされ、悦申候、まひ
くきのふひ、いあその守殿御とりつきにて、(桂昌院)三の丸様より御ひの木
重をいせやういさし、有うさく存まいらせ候、くさくひ、つなまうさか
申上候へく候、こん日ひ、御城へつなま上り、萬御志ゆひよく御座さ候
はんや、めてさくうさくけあくせんし、めてさくし。

(元祿九年)

五月十一日

か

中將

人々御申

粉

二〇一三 伊達綱村書狀

御狀致披見候、品河様益御機嫌能被成御座之旨、追々承知、恐悦奉存候、
奥方貴殿御無異之由、悦入候、今度之爲祝儀、去月廿五日信濃殿、廿七日若
狹殿に饗應、祝候旨、御申越、入御念事候、去三日よき、御講釋拜聞願、

願講釋拜聞

(柳澤吉保)
出羽守殿右京大夫殿に御越候旨、一段存候、當地無別條、我等堅固在之候、
恐々謹言、

左中將

(元祿九年)
六月九日

綱村

藤次郎殿

二〇一四 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

藤二郎殿

左中將

猶々、花入箱遠刃書付候由、一入秘藏之事候、已上、
爲土用見舞飛札、殊品々給之、致満悦候、暑氣之節、家君弥御機嫌能、
恐悦奉存候、奥貴殿無異悦喜候、此方無恙候、可御心安候、今日者、歸國
以後始講釈、上山傳右衛門中庸講之候、段々承答候、其後小納戸之脇間

綱村中庸
ノ講釋ヲ
聽ク

之座敷造作改、休息所ニいとし出來、晚之料理祝候、成程麁相之義ニ候得共、様子殊外宜候、給候肴致料理、奥方給候肴祝申候、茶碗も即用之候、花入ハ茶湯ニ出候半と存候、何殊外能悅申候、喜右衛門と噂申、御物數奇ニ而ハ有間敷と申候ハ、數々之内御撰候由申候、致感悅候、新茶來候間、幸祝申候、爰許之様子、喜右衛門登候時分、委細御聞候半、喜右衛門事、鹽竈之儀用候而、少々延引候義も可有之候、

一廿一日、築地、奥同道御出、御祝之由、珍重候、奥方飛脚文給候、返夏自筆より不申候、此文之通、被懸御目、委細御申可給候、奥方給候縮三端則仕立申付候、一端七九郎ニ遣候、一端玄佐(櫻井)、文九郎出候間、幸ニ玄佐方へ遣候、玄佐快方ニ候、文九郎成人候、節々出申候、梅之丞(茂庭)無事候、今日今度之屋敷へ移徙仕候、猶追々可申候、恐々謹言、

六月廿七日

左中將

綱村

藤二郎殿

二〇一五 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

○コノトコロ、封シ目、紙ヲ切取リテアリ、

藤二郎殿

左中將

去月十八日之御狀具令披見候、品川様益御機嫌能被爲成御座之旨、致恐悅候、奥方貴殿御無事、悅入候、我等打續堅固ニ候、可御心易候、一元服被 仰付、御字拜領之御儀も御座候ハ、諱之事山家織部へ申聞置候、御聞届之旨、得其意候、彌村之方可然候、宗之字も苦間敷候、かへり字田邊喜右衛門へ猶以御聞可有之候、同官位被 仰出候ハ、兼官之事彈正大弼ヲ被申可然候、越前守も此方ニ指支無之候、究候而者、御申上兼候儀も可有之候、越前守之事、若々於 品河如何と被思召義も可有御座候、貞山公義山公被任、其上 高房公爲盛公被任候間、要

吉村ノ諱
官位等ニ
ツキ綱村
ノ意見

宗) 山様之御名よても苦間敷候、前方 品川へ御申上置可然候、無用と被成御意候ハ、宮内太輔ヲも可被申上候哉、伊達宮内少輔殿有之候へ共、其段ハ前方そと此紙面ヲ遠江守殿右京太夫殿美作守殿へ被爲見、宮内殿金之介殿へ被申達可然候、左京太夫大膳太夫兵部太輔、何松平同シ名なうまニ有之候間、成申間敷候、尤大膳太夫殿も御座候義ニ候、一一門中家老之面々誓詞被上之候ニ付而、我等心入之由委曲示給、慇懃之至ニ候、乍勿論一段之事ニ候、萬々期後喜之時候、恐々謹言、

一門中家老ノ誓紙

(元祿九年)

八月一日

左中將

綱村

藤次郎殿

二〇一六 萬壽寺 綱村夫人 消息

綱村夫人 稻葉氏

まい日く、見まいは御出候事よて御さ候程かく一七日もすき申候て、一

稻葉正則ノ初七日忌

し不よそんしり、こ、元の事御こ、ろあく覺しめ候はんそんしり候て、わさとむきやくよて申あせり、と、

一筆あせり、候よく御機をんよく御さかされ候よ承、悦り、まつくわさく事、御心もとかく覺しめ被成候て、と足つら長門本多うなめ、をい、御使しや下され、うさけかくそんしりせ候、仰被下候通、ちうらおと、と不ふも御さかく、一人のをうよそんしり候へとも、せひをか記御事や存きり、一日くどくらら、此さひハ藤二郎殿扱くううくある事、さへ申物ともよも心入成御事、それゆへ志よくよもさへつき申候て、今不と老、大うさつ不とこへ、心もよく御さ候ま、少もく御きつらい被成ましく候、藤二郎殿こ、ろ入ともよて、なくさみまきれくらら、と、

綱村夫人ノ愁傷ト吉村ノ孝養

(元祿九年)

九月十四日

か

奥州様

人々御中

粉

二〇一七 伊達綱村書狀

猶々、壹岐儀安軒大慶可仕候、乍序、今朝致爐開圍ニ而茶立申候、薩摩殿其外相伴、茶振廻申候、御清も無事ニ逗留之事候、今晚分段々口切之茶湯ニ逢申事候、委細ハ追々可申入候、已上、

一筆申入候、今日之御祝儀目出度存候、品川様益御機嫌能被成御座之旨、追々致承知、恐悅奉存候、貴殿彌可爲御無異、珍重存候、然者今日富田(紹實)壹岐奉行職申付候、役料千俵遣之、都合三千石之高ニ申付候、珍重之儀候、右之段、品川様ハ以飛脚申上候付、如此候、且又長沼下野儀月番加判赦免、布施刑部儀若年寄申付、加増二百石、都合千石余之高申付候、猶追々可申入候、恐々謹言、

左中將

綱村

(元祿九年) 九月廿八日

富田紹實
ト奉行職
トナス

藤次郎殿

二〇一八 伊達綱村書狀案

(包紙ウハ書) (封目) (花押)(綱村) 十月二日

弘福大和尚へ上候二通之留

○右包紙ウハ書ハ、綱村ノ自筆ニシテ、第二〇一八號第二〇一九號兩文書ニカ

稻葉正則
ノ追善

謹言上、雖向寒氣 法體萬福之旨、追々承知、恐悅奉存候、泰應居士追善(稻葉正則)之更申上候處、上堂并水懺御執行之由申越、忝仕合奉存候、陽德通玄和尚東昌虎溪和尚と御噂、度々念比ニ申上候、東昌和尚へ被仰越候一件之儀も、下官不存分ニ而、密々具ニ承知仕候、

一先達而垂語之答話献之候、幾度も御吟味被成被下、少後合点仕候様ニ奉願候、
一下官存念之通、左ニ申上候、所仰慈諭無他候、

多年折々諸方之和尚ニ奉承知候處、承當せよと被仰、或とろく坐禪ヲ仕候へと被仰、其外色々被仰候御衆御座候へ共、何共可仕様無之候、とろく學解よとも、意子計も心得候而、法中之遊ニも仕度と奉存候段、拜面ニも申上候、扱又偈よ老、大躰出家衆之御申候よ似申候、或も仕候へ共、心中ニ落着無之候、意子をも存、妙心派之參學をも仕候ハ、氣味合ニ而胸中ニ有之申出兼候所申出候事も、可罷成哉と、申儀も、拜面ニも申上候キ、此趣或人ニ申候而、起信心可申様尋申候へハ、さやうニ可有之候、とろく生死事大無常迅速を、直下ニ觀シ、諸法我相ノ幻ナル、實ニ觀シ候ハ、可然と、就夫段々示被申候、此段兼々存候儀よてハ御座候へ共、被示様子能御座候故、銘心申候、其後事ニ觸、甚轉せらる候へ共、折々も、兎角幻ナル事を存候儀、以前よ異ニ御座候、右被示候時節、彼是語見申候申候内、趙州無之話之儀、露及劍之頌之儀ふとも被申候、ろやうと可申上様ハ無御座候へ共、少ハ心よとほり申候、其後十日あまり、二十

日計も御座候而、下官命鑑命鑑之上、其外ニ而もヲ所望仕候よ七十七歳と見へ其上奇妙成見申候とけ、十歳之時夢ヲ見申候よ乙卯之年と申儀相當候儀ふとも御座候、其外相當仕候とけふとも御座候故、未永キ事之様ニ計命鑑之上、其外ニ而も存候へ共、とろくさやう之とけをハ指置、無常を急見申候観シ、詰見申候ハ、ト存、急見申候観シ候而見申候得者、けよハ何、或も心よとまらぬとけと、理智見申候なりら常々ニ存候よりハ徹シテ被思候、夫ふとよかくは諸法ヲ幻と見申候へハ少ハ心安方之様ニ御座候、扱又彼人よ最前申談候時節、無之見ニ可罷成と、氣遣成氣味之段氣味ヲ申候ハヲ申候處無之見之とけハ、さやうよてハ無之と申儀、具ニ被申候、それよ付之、弥前よ書付候通、引合快様ニ御座候而、無よハ落在着不仕とけ哉と存候、扱龐居士之録圓覺經ふとを見申候而も、何となく少ハ通シ能方之様ニ御座候、右之筋ニ候ハ、三毒モろく可成様ニ存候、三十日計之内、とろく一日々々と進覺以外被轉候而候様ニ御座候而、被轉候へ共、唯今迄ハ畢竟跡へさざり候様ニハ無御座候、近キ比大

惠書を少見申候にも無し見ニナルヲ恐レ候と御座候へハ下官の心と
一つは御座候と存弥惡敷にて有之間敷哉と存候

一法華ニハ、諸法實相ナド、御座候而、下官が見ハ、拆空觀之様ニ御座候へ
共、諸人多クハ、直ニ諸法實相ト見申候而ハ、中々諸法實相ニ成不申、
いつの時にも、迷ヲ破リ申間敷と奉存候、諸法ヲ幻ト見申候而ハ、自他
ノ相ヲ離レ、さてこそ諸法實相ハ可有之と奉存候、如此了解仕候ニ、
一つモ不幻物ハ無之候、一切幻時那箇カ非幻物にて候と、彼人ニ尋見
申候へハ、段々被示候にて存候よ、一切幻トおもふ物ガ残りて居申歟
と申候へハ、さやうにて候と被申、一切幻ト分別シテ申候、よほと能筋
にて候間、急よ工夫仕候様ニと被申候、扱存候へハ、一切幻トおもふ物
モ幻ニ候へハ、何よ付かよ付、忘レント欲シテモ忘ラレヌ様よ可成
儀と奉存候、此句一字忘却學道人不知眞、只爲認從前識神、無始却來生死本、癡人呼作
本來人、ト有之モ、幻ト思フ物ノ殘りて居ル事にて御座候哉、

一彼人被申候ハ、一寸二寸ニテモ、禪定仕候ハ、可然候とて静坐仕候ハ、
忘申間敷候、其上なりく仕候ハ、急度一寸二寸仕候方ガ、まさり可申
と被申候、其外委細工夫之様子被申候へ共、忘却仕候、

一垂語ノ答話仕候ハ、三十日程前よ仕候ヲ差上申候、
一別帟一通奉献候、一つよ申上候而ハ、紛申候間、如此御座候、別帟之趣ハ
別帟段ニ被遊、とて御ゆるし不被成、御吟味被成、少ツとも、未々とも
に、能方へ參候様奉願候、ゆるさ候へハ、それ切ニ罷成、修行進ミ申間
敷候、別帟之趣ハ、そと切ニ仕度心得ニ而ハ曾而不申上候、誠恐誠惶敬
白、

(元祿九年)
十月十二日

御官
綱村百拜

上(道機)
弘福老大和尚
獅子座下

二〇一九 伊達綱村書狀寫

右本紙ニ言上仕候通ニ御座候、前々ハ氣味合よて存候迄よて御座候、只今者、よかきあしうきかやうと心ニ落着有之、修行も進可申様子ニ御座候、かやう之時節、御直々度々蒙 慈教候ハ、修行進可申と、銘心肝奉存候間、是非御下向奉願候、月耕和尚之夏、仕よくきあそい共も御座候へ共、大夏ニ難替儀ニ候間、御下向被成候ハ、可遂面候、此趣ハ、東昌和尚ともひそろにハ語り申候、陽徳和尚も東昌和尚も、御下向被成候ハ、可然と可被存様子ニ候、陽徳和尚ハ、月耕和尚之儀ハ不被存候、扱又先達、附屬之儀、少御沙汰御座候、品々申上候得共、老大和尚之後、亦善知識ニモ逢うとく可有御座候へハ、心細キ夏、カヲ落しとる事、筆舌ニ及不申候、然と得所無御座共、附屬ヲ得、修行仕候而可然哉と、近き比ニ成奉存、且又とやうく存候も、世念名聞之念よて、却而あしく可有御座哉とも存候、密々陽徳和尚東昌和尚ニ相談仕候處、早々得 附屬候ハ、可然と被申候、其

綱村道機
ノ仙臺下
向ヲ望ム

御地よりも被遊様も可有御座候得共、就夫品々をけく共も御座候間、拜面よ委細得 道慮、御相談申上度夏共も御座候、結制中ハ被爲成間敷候ハ、來正月十五日解制早速御下向奉願候、陽徳和尚も、得所有之かど、此間大分落字有り得 附屬不申候而ハ被轉、さめ申候へハ、以之外之義、附屬候ハ、さめ不申、弥修行も可仕候、大和尚之後ハ、難逢善知識可有之候間、得 附屬可然と被申候、陽徳東昌兩和尚へ相談仕候と御座候夏ハ、兩和尚至而遠慮よて可有之候、曾而御沙汰あし、書狀も火中奉願候、とろく拜面あらてハ、委細ハ難申上候條、御下向奉願候、附屬之儀、本番よ申上候をけよて申上事よてハ、無御座候、最前月耕和尚之儀被仰下時分ハ、此所存無御座候故、只今申上候趣と相違ニ御座候、諸夏本番へ御引合、御覽被遊可被下候、誠恐誠惶敬白、

(元祿九年)
十月十二日

御官
綱村投五百拜

成御様子、諸人共感嘆仕事ニ御座候、拙老義も、中陰中今日迄ハ成程堅

弘福寺道機牛書狀

23

總て能く結ぶ御事と云ふ
 御書才より書付下りて
 辱甚重く是れ少くも御
 心成に之を字に傳へ
 急ぐ様如く此より殊に
 心成に御事と云ふ
 何れに御事と云ふ
 中陰に漸く書付下りし
 一書ノ見ノナレト尤ニ何レ大惠書中
 示サレ通りニ其外命セヨレ候
 大低なるし一寸ニ寸ニモ福定ハ
 ナサレ可也ト申サレ方々ニ此段
 殊に心成に御事と云ふ
 上心ヲ宋ニ物に云ふ
 才一ヨリニ有リ生カニ歎ク物ハ
 禪定ニ過スルニ常ノ心
 掛ルニ御事と云ふ

十日十日
 仙臺中傳候

小川一眞



小川一眞製版

固、昼夜追善相本望之至、冥慮ニも相叶候哉と、怡悅仕事ニ御座候、賢
体様分も、重々被爲入御念、御法事被仰下、相勤候所ニ、何も御役人中、
殊之外精被相出、丁寧ニ諸事被相勤候而、何も感悅被仕御事ニ御座候、
有増先書ニ申上、法語等も爲書指上候、疾ク相達可申哉と奉存候、陽徳
通玄和尚東昌虎溪和尚ト御噂、度々御念比ニ被仰出被下候由、別而忝
次第ニ奉存候、且又東昌和尚へ申入候一件も、御存不被遊分ニて、密々
具ニ御披見被遊被下候由被仰下、千萬く難有忝次第ニ奉存候、兎角
出家ハ世法も不存、愚拙等ヲ初として、諸事御上人御大人之御目ニハ、
不届ニ被思召候事而已ニ而可有之と、慚愧千萬ニ奉存候、他人分上事
ニ而ハ無之義と、慚悔申計ニ御座候、左様之段ハ、慈悲ハ上分下り申義
ニ候へハ、諸事御宥免被遊被下候様ニと奉願候、
一垂語之答話被下候、幾度も吟味仕候而、少も御合點被遊候様ニ可仕旨、
奉得其意候、此度被下候御着語之批判、別書ニ申上候、

一 多年諸方之和尙ニ御尋被遊候所ニ承當被遊候様ニと被申候、或ハ兎角坐禪を被遊候様ニと被申候、其外色ノ被申衆有之候へ共、何共可被成様無之候、兎角學解ニても、意子計も御心得候而、法喜之遊ニも被成度被思召候由、何事も、其段最前も被仰聞候段覺え候而罷在候、其節も申上候哉、忘却仕候、其段ハ分別知之上計ニてハ、御決定之信ハ難被遊事ニて候故、可被成様無之と被思召候段、御尤奉存候、承當ノ申而も、無理ニをし付候而、承當之成申ものニハ無之候、坐禪ノ申而も、無理ニ坐を仕候とても、心念不穩してハ、坐ニ益ハ無之候、心不調してハ、却而煩勞を生し候而、心散亂仕やとく候、大体坐禪と申さけ、あらま可申上候。

禪ハ梵語ニハ禪那、此ニハ靜慮と翻し申候、禪と申ニハ、四種の禪御座候、ゆひかいゆの冬穴こもり仕居申候、諸念を亡しい申候も、業定と申候而、是も禪の一分ニ而候、其外様ノ四種の禪ハ、志申分候へハ、長

キ事ニて御座候故、不申上及候、我ハ祖宗門下之禪と申ハ、教ニ至極として沙汰ノ申、如來清淨禪と申ものニて、是も分別知解を以て被得申禪ニてハ無御座候、故ニ禪宗の工夫と申禪ハ、敎家ニ沙汰仕所の、觀法の様成事ニてハ無御座候、己ニ分別知解を以被得候禪ニてハ無之候故、久參ニ而候程ニ、此禪ニ相應ノ初機ニ而候程ニ、此禪ニ相應仕間敷と申様成禪ニてハ無御座候、此禪ニ相應會得と候事ハ、我も不知佛も不知所ニて候故、あちちニ坐ニうきと申事ニても無之候へ共、人の身をおき申ハ、四ノ威儀ニハ過不申、四威儀トハ行住坐臥ノ、扱禪ニハ昏散亂無記掉擧と申而、四の病と成申候、其内散亂と申ハ、念慮のちりミと候、を申、妄念の多大成を申、昏沈とくらく志をむと書て、睡りの事ニて候、無記と申ハ、志を事と書れば、心ノ主と候覺もあく、ける、仕と候所、是工夫ちうらく、性体なきゆへニ、無記心と申、掉擧と申ハ、妄念散亂の心ニ而ハ無之候へ共、ふりあがりて、氣いきと

をり、念靜ニと、のまごゑを申あり、是を禪定の四病と申て、此四ツ中一ツも念頭ニ出候へハ、禪定ハ成不申候、故ニ四威儀の内、行ハ散亂仕やとく、住ハ掉擧仕やとく、臥ハ昏沈の糸むと付やとく候て、正念の工夫成かさし、只坐の時計、形も正シク、睡も不付、心と、のいやとく有之故、四威儀の内、坐の時計、禪修をゆよ便よきゆへ、禪定ニ相應の身持ゆへ、坐禪くとい申て候、いろよ形ハ坐居りとも、昏沈り散亂り無記り掉擧り、四ノ病一ツモ有之候ハ、禪定の工夫成就難仕候工夫と申詞ハ、唐の郷談ニて、和國の隙と申詞の心々、工巧士夫、一日工程見ルカ如シト註して、細工仕ル人ノ手ニテモ、目ニテモ、心ニ別事ノ分別ありて他念ニことり申事有之時ハ、其日ノ細工ノ功それとのおこりニ罷成、をり參り不申ぐとく、工夫も心他念ニことりて、話頭上ニ一片ニ無之候時ハ、工夫一片ニ成不申候、工夫一片ニ不成時ハ、心念の明ニ靜ニ可成様無之候、然ラハいろよして、心の一片ニ成り、疑の破き可申様無之、念慮の靜ニ

可成様無之候、然ラハ何として、無量劫來習氣無明の業識、破きくさけ可申哉、然ラハ何として、大悟發明可有之哉、うまのそらニうろくと坐していざまはとて、情識の消磨可仕様ハ無之候、只一念成共片時成共、時くニひいと、行住坐臥四威儀の中ニ、工夫一片ニ御成候ハ、たとい悟不とにこそ無之候とも、心念ハ自然ニ消磨して、後ハ心念いつとあく穩りに成可申、心念おさやりに御成候ハ、いつとあく、大悟發明ハ無之候共、一切の道理自然ニ明ニ成可申候、況ヤ如是、日久ク月深クバ、時あり節ありて、不知不覺ノ間ニ於テ、豁然トノ投税可有之候、禪門修行之妙ハ、此ニ有之事ニ御座候、故ニ日用應縁ノ間、念く心く、常ニ工夫油斷ナク御心うけ候ハ、自然と心念穩ニ可罷成候、左候ハ、一切公案も、其工夫ノカホトニ、明ニ通シ可申候、必坐ト申計ニもカキリ不申候、故ニ禪門ニハ、先ツ万事ヲ打ステ、工夫一片ニ仕候へハ、學問も道理モ不習シテモ、心サエ少シヒラケ候へハ、万事自由ニ成申事

候、是ハ常々無間斷御心掛候ハ、いつとなく、驗ハ御覺へ可有之候、故ニ禪門之工夫之靈驗ハ、如是ニ候、必大悟發明不仕候へハ、工夫役ニ不立事之様ニ存候ハ、修行無之不眞實故ニ而候、

一偈ふとニハ、大低出家中之申候ニ似申候事も被遊候へ共、心中ニ御落着無之候、意子をも御存、妙心派之參學をも被成候ハ、氣味合ニ而、胸中ニハ有之候へ共、被仰出兼候所被仰出事も可罷成哉と、最前も被仰聞候、或人ニ右之通被仰候而、信心被起候ハ、趣御尋候へハ、左様ニ可有之候、兎角生死事大無常迅速を、直下ニ被觀、諸法無我を被觀候ハ、可然と被申候、就夫、兼く御存候義にて候へ共、被示様子能候故、御心ニ被銘候、其後事ニ御觸、甚被轉候へ共、折くも、兎角幻ハ、事を御存候義、以前ニ異ニ御座候由、一段珍重成御義ニ御座候、上代ハ人の心強、誠ニ御座候而、豪氣強ク御座候故、人我の情識強候而、道心の障ニも強ク成申候故、法ニ心入出來候へハ、皆無常を觀し申様ニ、何も勸申候と相

見へ、昔の道心者の專と心得候ハ、皆無常の勸にて御座候、依之、諸法の如幻、我相の無常成事を觀し候へハ、ひとり菩提心ニおもむき申候、八宗共ニ、菩提の發心と申候へハ、皆無常如幻ニ本付申候、教にて御座候、然もとも、自性を發明と申者ハ、無之候、禪宗出興して、見性明心と談し候而、頓ニ心性ニ眼を付候而、機利ニ性頓ニ罷成候、自心自性ニ眼を付候へハ、如幻も無我も、自然ニ此中ニ明ニ成候而、頓ニ如來地ニ超ゆ理を發明仕候、煩惱菩提共ニ超テ、直ニ八識田中ニ一刀を下して、本分田地ニ至ゆと知ハ、禪門ノ入路にて御座候、此修行ハ、悟不悟のせんさくにてハ、無御座候、證據ニハ、只今大居士、自性在何所、直ニ御疑被遊御覽スル時、本々眞性ハ、色相名字一切の義理道理を離れれば、分別知解ヲ以テモ不被會、念慮意想を以テモ不被知、ひとり位次階級も超テ、直ニ一念不生ニカヘルヨリ外ハ、無之候、於此テハ、無常ノ無我ノトワキマヘル見も、離レコヘテ、進退イカントスヘキ様モ有ルヘカラサルヘシ、

此處イヨ／＼ステヲカレサルユヘ、イヨ／＼精采ヲ付テ、切ニセリツ
 メ／＼疑ヒ、イヨ／＼切ナレハ、イヨ／＼疑シクナリ候ハ、時アリ節
 ナリテ、忽然トシテ、疑心クタケヤフル、ヨリ外ハアルヘカラス候、是
 ヲ投税ノ時節トハ申ニテ候、此時節ニ到テハ、佛ノ、衆生ノ、悟ノ、迷ノ、
 我レノ、人ノ、賢ノ、愚ノ、善ノ、惡ノト、一切ノ差別ヒトリ亡シテ、自己ノ
 眞心、求メサレヒ、ヒトリアラワレ、無明根株ノソカサレヒ、ヒトリヌケ
 可申、サレヒ、此ノ處至極究竟ト可認ニアラズ、ツトメテ修鍊セサレハ、
 イツトナク、鏡ニクモリノツク如ク、不覺習氣ニヒカレテ、不自在ニナ
 リ申ス、此處ニテ、眞正ノ善知識ナケレハ、此ノ窠窟ヲイテカタシ、御
 書中ニ仰セコサレ候事ハ、皆知見分際ノ修行ニテ、當分ノ慮知心念ヲ
 サバク分際ニテ、究竟ノ修治ニハアラサル、似タルヤウナルコトニ
 テ候ヘ共、圓覺經ニ、知幻即離ナル、不作方便、離幻即覺、亦無漸次、此文
 ノ意ハ、諸法ハ實ニ幻ナリト知ルトキハ、幻法ノ貪着ハ即離ル、ナリ、

離レタレバ着心ナシ、是レ即覺ナリ、此時何ンソ、トシテカクシテノト、
 漸次ノ知慮分別アラシヤ、譬ヘハ、人ノ夢中ニ、身ニ瘡アリト見テ、醫ヲ
 尋テ、藥ヲ求ルカコトシ、忽夢サムルヲ得レハ、夢中ニ求ル所ノ種々
 ノ方便ハ、皆妄幻ナリト、捨テ、トルヲ無キカコトシ、一切時中、如是用
 心スレハ、悟ラスト云トモ、迷ハサルヘシ、故ニ次ノ文ニ、一切菩薩及未
 世ノ衆生、依此修行スヘシ、如是ナラハ、乃能ク永ク離諸幻トアリ、無常
 ト觀スル心ニハ、アジキナキ心ヲ立テ、所着境ヲ待メ、破ルユヘニ、當
 分所着ナキヤウナレヒ、貪著ノ心未亡、當分着心ウスクナルヤウナレ
 ヒ、跡ヲ消スルヲアタハサルナリ、サリナカラ、當人ノ機ニヨリ申スコ
 ニ候ヘハ、定法ハコレナク候、用テ御覽アリテ、驗シノフカキ方ニナサ
 ルヘキ、修心ハ、人ノ藥ヲ用ユルカ如シ、ヨキ藥味ナレヒ、其病人性ニ
 不合時ハ、益ナシ、輕キ藥ナレヒ、病人ノ性ニ相應スルトキハ、千金ヨリ
 モ利アルナリ、

一無ノ見ノ、ナルホト尤ニ存候、大惠書中ニ示サル通りニテ候、其外仰
セコサレ候趣、大低尤ニ存申候、一寸二寸ニテモ、禪定ハナサレ可然ト、
申サレ候方有之候由、此段弥尤ニ存候、空心靜坐ニテモ、禪定ホト心ヲ
安ニスル物ハ無御座候、御養性ニモ、第一ヨク可有御座候、生死ニ敵ス
ル物ハ、禪定ニ過タルハ無御座候、常々御心掛御尤ニ奉存候、恐惶謹
言、

(元祿九年)

十月十九日

(道機)

自牧和南

仙臺中將様

道機鐵牛書狀

御別紙辱拜見仕候、本紙ニ被仰下候趣、委細致承知候、頃ハ御修行も御進
有之、實ニ御心ニ御落着有之、別而御進被遊候由被仰下、大慶千萬、不過之
奉存候、依之、ケ様之時節、御近所ニ罷在、御直々御物語をも申上候ハ、

道機仙臺
下向ニ就
テノ内談

御修行御進も可被遊と被思召候間、是非下向申様ニと被思召候由、別而
一入忝御意ニ候、一件之義も、被遊能あとい共御座候、下向仕候ハ、可被
遂面候、此趣也、東昌和尚とも、密々ハ被仰談候由被仰下、辱次第ニ奉存候、
陽徳和尚東昌和尚も、下向仕候ハ、可然と、被思召様子之由も被仰聞、一
入ニ奉存候、扱又附屬之義ニ付、段々御思召入之義共、委曲被仰下候趣、
於愚老、辱次第、難申盡候、殊ニ陽徳和尚東昌和尚之雅意、令感心義ニ御座
候、兎角御對談ニ、委細御相談可被遊間、結制中不罷成候ハ、十五日解制
以後、下向可仕旨被仰下、奉得其意候、内々年來因縁深御賢檀ニ候ハ、一
度ハ罷下候而、御城下を一見仕、萬歳を可奉祝本意ニ候と、年月存暮罷在
候へ共、兎哉角と世事變違候而、不能其義、無本意罷過候、近年ハ及老衰、
漸其念頭相止、因縁次第と存罷在候所ニ、承御意、夙志も發起仕候間、此元
之様子見合、冬中ハ結制中、其上泰應老居士百ヶ日も、臘月中旬ニ相當候
へハ、旁罷成間敷候、正月末二月初ニ、何とぞ存立、御見舞可申上候、乍去、

入湯ニ託
シテ下向
セントス

老拙下向候義ハ、先書ニも申上候通、御公義ハ兩件之願申込、折々罷出ニ候ヘハ、態と御見舞ニ罷下候沙汰ニテハ、以之外不宜奉存候、黒羽迄入湯之斷申立候而、五三日も入湯仕分ニテ、其ハ一見ニ立寄申分ニ申立、可罷越候、少も其元筋ニテ、罷下候御沙汰と、遮而有之候ヘハ、言語道斷不宜候條、堅御近從勿論、東昌陽徳兩和尚ニも、堅御沙汰不被遊様ニ奉願候、上方筋とニテも、今年之秋之比ハ、貴國ハ罷下候々申沙汰有之由、方々申越義ニ候、拙僧とヘ心ニ決不申、勿論口外ハ出不申事、何者存候哉、此方ニテ沙汰も無之義、江戸ニテも、上方ニテも、申觸し申義ニ候、申上迄ハ無御座候ヘ共、其元ヘ參着仕候迄ハ、御用意ケ間敷、人も察申様ニも無之様ニ、被遊可被下候、左様之沙汰遮而有之候ヘハ、御公義ヘ申上事いり、敷罷成候、不斗立寄申様ニ被遊可被下候、兎角春迄之内、様子見合、可申上候、且又別紙ニ被下候垂語之御着語、別紙申上候、恐惶謹言、

(元祿九年)

十月十九日

道機

和南

仙城賢大守中將様

御近從衆中

IIIOIII 伊達綱村書狀

猶々、豊後守殿御念比御指圖被仰聞、忝思召候、去九日朝以使者御禮御申候由、一段之儀存候已上、

吉村元服ノ内意

(阿部正武)
(松平輝貞)

御飛札致披見候、然者其方元服之儀、豊後守殿ハ御内意被仰聞、難有仕合之由、先以難有奉存候、就夫諱之儀等、右京大夫殿ニ相談書付候而、松元縫殿使ニ而豊後守殿ニ御上候、献上物等之儀も、坂元勘之允を以被相伺候處、何様御相談、早速御指圖被成、忝次第思召候、委細者大町清九郎方ハ申越候様ニ御申付候段、令承知、恐悅之御事候、十五日前支度仕候様ニ与之御事候間、近日被仰出儀も可有御座哉之由、珍重難有仕合候、就京都之御事御延引与奉察候、如何様無程目出度御左右奉願候、委示給、悦入候、猶期後喜之時候、恐々謹言、

献上物

(元祿九年)
十一月廿二日

藤次郎殿
御返事

左中將

綱村

二〇一三 伊達綱村書狀

吉村ニ茶
釜ヲ贈ル

猶々先頃遠藤内匠茶上候節、釜輕貴殿ニ上候而可然と申候付而其元ニ指
上候様子も能一入御悅候旨示給入御念事候、以上、

御飛札致披見候、品川様益御機嫌能被成御座旨、追々承知、恐悅奉存候、
奥方機嫌能、貴殿御無異之由、大慶存候、然者先日自筆端書、亥之助殿儀申
進御怡候、信濃殿并若狹殿薩摩殿兵庫殿にも御申越候、慶雲院貞樹院可
被致大慶旨、委細御申越、入御念事候、爰許無別條、我等堅固候間、可御心
安候、恐々謹言、

左中將

(元祿九年)
十一月廿二日

藤二郎殿
御返事

綱村

二〇一四 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

侍從殿

左中將

吉村ノ元
服
一字ヲ賜
ハリ侍從
越前守ニ
任ゼラル
進上下拜
領
桂昌院及
人へノ獻
上

其方儀廿六日元服被 仰付之、於御黑書院、御前ニ被 召出、上意有之、
御字被下之、於御次、侍從被 仰出之旨、御老中御列座、相模守殿被仰渡
之、越前守兼官、號吉村候、以御太刀品々進上物御禮申上之、御引渡御相
伴、御盃頂戴之、御腰物左文字拜領之、段々難有仕合之旨被申越、奉承
知、冥加ニ叶忝仕合、同意奉存候、於 品川難有思召、奥にも御同意被存儀、
不及申候、三之御丸様 御臺様に獻上物も首尾能指上之旨、恐悅之御
事候、諸夏委細被申越候、珍重候、一々使片平新三郎歸之時分可申候、御禮

以伊達左兵衛申上御更候、先難有段御悅旁、品川へ言上、貴殿へも爲可
申上、使者爲指登候、肴進之候、幾久祝入候、恐々謹言、

左中將

(元祿九年)
十一月廿九日

綱村

侍從殿

二〇二五 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

左中將

侍從殿

綱村

御返更

吉村ノ元服
侍從兼越前守ニ任ゼラレ名

片平新三郎被指下、御狀口上之趣、具致承知候、先以益、御機嫌能被爲成
御座、恐悅御同意奉存候、然者廿六日其方元服被、仰付之、於御黑書院、
御前に被、召出、上意有之、御字被下之、奉頂戴之、於御次御老中御列
座、侍從被、仰出之旨、相模守殿被仰渡之候、越前守兼官、諱定吉村候、則

ヲ吉村ト賜ハル

桂昌院及
比綱吉夫
上人ヘノ獻

先祖ノ靈ニ奉告ス

名字折紙
ヲ先祖ノ
靈前ニ供フ

以進上物御禮申上之、着座御引渡御相伴被仰付之、御盃頂戴之、御腰物
左文字拜領之、段々難有仕合、冥加至極之旨被申越之候、難有次第、可申上
様、無御座候、品川様御同意思召、奥ニも同意被存儀、不及申上候、三之
御丸様、御臺様、進上物、首尾好差上、忝仕合之旨、珍重之御更候、委細
被御申聞之通、一々目出度存候、御祝肴給之、幾久悅入候、珍重候、於爰許
後、先々早速祝儀調之候、万善堂因縁殿參詣、祭禮調之、令言上候、委曲新
三郎可申上候、恐々謹言、

左中將

(元祿九年)
十一月廿九日

綱村

侍從殿

御返事

先々、御字御折紙之寫謹頂戴之、三澤信濃被下、奉拜見之候、万善堂因縁殿
祭禮之節奉備之候、珍重之至候、以上、

二〇二六 伊達綱村書狀

猶々、去々年仕合能候處舊冬も難有儀共ニ而、冥加ニ叶、目出度春ニ而候、以

上、

新春之慶賀不可有盡期候、先以御機嫌能御越年、年頭之御儀式首尾好可相調、天下恐悅同意候、家君御勇健御重歲、恐悅御同意奉存候、奥無事、貴殿堅固越年、殊更舊冬元服被 仰付、始而年頭之御禮可被申上、恐悅之義御座候、遠江守殿始無事重歲、珍重候、當地靜謐、我等堅固越年候、祭禮祝儀等首尾能相調候、委細者追々可申候、慶雲院貞樹院も達者重歲、珍重候、若州始無異被重年候、猶永日可申候、恐々謹言、

吉村初度
ノ年頭ノ
禮

左中將

綱村

(元祿十年)
正月元日

侍從殿
進之候

○左ノ一通ハ、第二〇二六號文書ニ添ヘタルモノナリ、

元日

綱村

めく英ある君^(松平輝貞)の御代とや改玉乃年芝ひろり毛のとのなるらん

懸御目候、右京太夫殿へ、序ニ可被入披見候、年始之祝儀ハ、追而申入候

へ共、其内此序ニ、目出度と御申可給候也、

侍從殿

左中將

二〇二七 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

正月七日

侍從殿

左中將

進之候

御機嫌能 御越年之旨、天下一同奉恐悅候、次 家君御勇健御重歲、恐悅之御事候、奥方貴殿御無異越年、目出度候、七種之御祝儀旁、品河へ言上之間、申入候、肴進之候、幾久祝之候、當地無別條、下官無事、祝申候、今朝者

綱村元日
ノ詠

一宮へ、名代伊達安藝參詣、連歌も如例調之候、幼少隱居之輩年始之禮請申候、猶近々可申候、恐々謹言、

左中將

(元祿十年) 正月七日

綱村

侍從殿

進之候

二〇二八

萬壽寺 綱村夫人 稻葉氏 消息

返く、品河^返いよく御き多んよく御さあされ候まゝ、めてさく御心や
すく覺しめしあされ候へく候、不とあく御さんきんよて御めより、りあ
いらせ候はん^とめてさく待入らん^めてさく^と。

七日の御日付此文、かとしけなくせんし^ら、いよく御機嫌よく、まの
く御さんきんの御事、此廿九日來月二日の内、いつも此とく、い^{伊達安藝}てあ
き殿へ御首途被成、四月二日三日の内御つたのよ、めさ^とさ^と、御ち^らく

綱村始メ
芝多文
九郎宅ニ
臨ム

に成、うすくめさ^とく、待入らん、品河^返へ、御ひきやくにて仰上らせ候
よ、志^あ川様御まんそくニお^不しめし候はんと、一入めてさくせん
らん、扱ハ七日ニハ、志^あ文九郎所へそ^しめて入らせら^ま、志ゆひよく
御い^と并あそ^は、文九郎い^といけニ御ちそう申上、^御悦覺しめし候よ、
お^不し御事ニ、悦そん^ららん、越前守殿とさく^しそく^と并ニをりらん^ま
、御心やとく覺しめしあされ候へく候、めてさく^と。

(元祿十年) 後二月十三日

中將^{御返事}
人々御申

せ 分

二〇二九 近衛基瀬書狀

(糊封ウハ書)

仙臺中將殿

(基瀬) (花押)

追申、此方各々無異事候可心安候也、

基熙吉村
ノ詠草ヲ
添削ス

芳翰披見、先頃息之拾遺詠草加愚筆之處、爲謝儀一種到來、懇情之模様感
悅候、誠譜代之事不可思議之好縁候歟、即此比從拾遺預使札、印信等種々
慇懃之事候、先々其邊彌以清健之由、珍重思給候、猶期後便之時候、不宣、
穴賢々々、

(元祿十年)

後二月十七日

(基熙)

(花押)

仙臺中將殿

二〇三〇 伊達綱村書狀

御飛札致披見候、貴殿今度口 宣等奉頂戴候爲祝儀、先頃以使者、目錄之
通進候付、被御申聞、入御念事候、恐々謹言、

吉村口宣
ヲ賜ハル

左中將

綱村

(元祿十年)

閏二月十八日

越前守殿

(吉村)
御返事

二〇三一 伊達綱村書狀

御別紙致披見候、然者關白殿(近衛基熙)、詠草御添削之御禮被指上候使者片平新
三郎、去九日致下着候、依之、御自筆御返書、御懇被仰下、忝仕合被奉存之
旨、同意奉存候、右御返書被指越之、奉拜見、致返進候、恐々謹言、

吉村詠草
添削ノ謝
禮ヲ基熙
ニ贈ル

左中將

綱村

(元祿十年)

三月廿八日

越前守殿

二〇三二 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

侍從殿

左中將

爲益之祝儀、以使札肴兩種被相贈之、千秋万歳目出度祝申候、 品川様御

盆ノ祝儀

機嫌能、幾久盆之御祝儀可申上、奉祝候、次吾等夫婦無異、貴殿堅固、幾久と祝申候、貞樹院も無事、幾久目出度存候、猶使者口上申含候、恐々謹言、

左中將

(元祿十年) 七月廿八日

(網村) (花押)

侍從殿

御返支

二〇三三 淺井元秋覺書

由にて、秋山惣右衛門罷出候ニ付、他領々參、いゝつら仕候者、御仕置之事、惣右衛門を以、奉窺候處、御返答 被仰聞候趣、致承知候、先ハ前々々仰付來候通、本國に無御付届、仕置可被仰付候、乍去品ニハ、他領にひき申事も有之物ニ御座候故、一向ニ無御付届、仕置被成候様ニと、御挨拶ハ難申候、

右之通申上候様ニと、被仰聞候、

他領者仕置ノ事

(元祿十一年) 二月廿三日

淺井隼人

二〇三四 淺井元秋覺書

三澤吉左衛門へ可申達趣

陸奥守領内に、他領之者參候而、いゝつら仕候節、前々々、本國に付届不仕、仕置ニ申付來候、爲念御國持衆方に内々承合候處、大形ハ、左様之者仕置ニ被仰付候節、本國に御付届被成御様子ニ御座候、(島津綱貴)松平薩戸守様ハ、御國境にて、他領之者むさと領内へ入込不申候様ニ、被仰付由ニ御座候、(前田綱紀)松平加賀守様ハ、本國に御付届不被成、御仕置ニ被仰付由ニ候、陸奥守義、前々々申付來候儀ニも御座候、他領に付届仕候而ハ、將も明兼可申候間、無構手前にて仕置申付候半歟と被存候、爲念得御内意被申候、

他領者仕置ノ事

他家ノ例

○左ノ一通ハ、第二〇三三號及ヒ第二〇三四號ノ兩文書ニ關スルモノナリ、

(端裏ウハ書)

清三郎様
甚之丞様
佐左衛門様

隼人

御紙面承知、別紙致一覽候、元祿十一年之事ニ御座候、左様御心得可被成候、以上、

五月廿二日

二〇三五 江戸幕府老中申渡書

(包紙ウハ書)

美作様御願之通御國元ニ被相下御分地被返下候於 御城御老中様御列座ニ而被仰渡御書付壹通

元祿拾貳年十月廿八日

中村日向

松平陸奥守

伊達村和
除封

伊達美作守儀、在所ニ遣置度旨願之趣、達御耳候、勝手次第國元ニ可遣之由、被 仰出候、然者美作守ニ分遣置候三万石、陸奥守ニ被返下候、以上、

深川藏屋敷ノ拜領
藏屋敷六本
地ヲ本
木屋敷ノ
替地トセ
願フコトヲ

二〇三六 伊達綱村願書案

(端裏書)

御願之御扣平與次郎方々寫指添置申候

中村日向

深川藏屋敷拜領地ニ罷成、難有仕合ニ御座候、右屋敷狹ク御座候而、用事足兼申候、裏之明地屋敷ニ渡リ可申様ニ及承候、左様ニ御座候ハ、六本木屋敷家共ニ指上、少分成共、右藏屋敷續拜領仕度、奉願候、以上、

(元祿十二年)

十一月十九日

御名

二〇三七 江戸幕府老中申渡書

(包紙ウハ書)

元祿拾貳年十一月廿七日 大守様御登城遊被候處ニ御願之通深川御藏屋敷裏明地之内ニ而六本木御屋敷被替下由御老中様被仰渡御書付本紙

(封目)

〇(黒印)

中村日向印

(封目)
○(黒印)

佐藤主殿印

六本木屋敷替地ノ拜領

深川藏屋敷裏之方明地之内ニ而、願之通、六本木之屋敷と替被下之、

松平陸奥守

二〇三八 伊達綱村書狀

(端裏内封ウハ書)

侍從殿

左中將

深川に相越、今度拜領之所拜見候、様子も宜、一入難有、恐悅奉存候、此段爲可申、如此候、奥へ別而ハ不申遣候條、可被仰遣候、日向方にも被御申聞、并志摩方主水に申聞候様よと、其元近習之者ニ可被仰付候、恐々謹言、

(元祿十二年) 十二月廿六日

綱村

二〇三九 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

侍從殿

左中將

爲着城之祝儀御使札、殊目錄之通贈給、幾久令祝着候、如承意、御機嫌能、首尾好御暇被下置、種々拜領、致歸國、難有奉存候、品川様益御機嫌能被爲成御座之旨、具被御申聞、恐悅仕候、奥貴殿御無異之段、是亦具承、大悅存候、我等堅固、用等申付候、無程參府之節罷成、御目見、品川へも御目見、何後へも逢可申と、祝悅申候、猶使者口上申合候、恐々謹言、

(元祿十三年) 五月廿九日

綱村

侍從殿

追啓、品川へ使者差上候節貴殿へも祝儀申入候事等、委細示給御念入事候、以上、

綱村歸國

二〇四〇 八島伊左衛門跡式證文

○コノ文書紙ノ綴目ニ平貞澄ノ黒印ヲ捺シタリ、

貳貫九百三拾七文

伊左衛門實嫡子
八島喜太郎

跡式

右伊左衛門病死跡式、無御相違被下置候間、御本牒相直、御朱印下書調之候様ニ可被申渡候、但跡目之願指出候趣、遂披露候處、如願被 仰付候間、如此候、以上、

帶刀

元祿拾三辰
六月十三日

壹岐

西大條主計殿
小島藏人殿
大河内淡路殿

右之通、首尾可被申候、已上、

同年
同十七日

淡路
藏人
主計

御割奉行衆

右之通、御書付請取置、本紙書込ニ付、書拔如是候、以上、

元祿拾三年

六月十九日

平次兵衛

貞澄(花押)

芹立庄左衛門

景顯(花押)

八島喜太郎殿

二〇四一 萬壽寺 消息

網村夫人
稻葉氏

綱吉水戸家二臨ム
吉村講談ヲ聴開シ
仕舞ヲ觀ル

返々、いよ／＼御き嫌よく御さ被成候ハんと、めてさくそんしら、此不と
公方様水戸^(綱吉)へ御成の時分、越前守殿御りつてへ御つめ、萬御まゆひ
よく、御こうさん拜聞、御仕舞をいけんいさされ候、御まうきと仰ら終、
御もく録の通下され、うさけあさい日井入ら、御使しやうへり候時分、
御返事ニく日／＼御禮申上ら、ハんつれとも、まつ御禮申上ら、あゝも
と私もそく才ニおりら、まゝ御心やすく思し召被成へ候、めてさく
と。

綱村夫人
桂昌院ヨ
拜領ス

六日此御祝儀、めてさけ、おれし御事にい日井入ら、いよ／＼御き
んよく、御い日井あそい候ハんと、めてさくそんしら、あゝ元品川様
いよ／＼御きまよよく、越前守殿もきけんよく、けさ不ともれくへ御
出、一所い日井あいら勢、めてさき、悦ら、さやうニ御さ候へハ、十三日
ニ三之御丸様御意として、御兩人の衆分文よて、御ひの木重をい日や
ういとし、有うさくそんしら、御意も御さ候ゆへ、御兩人衆の御ふそ

御めよろけら、めてさくと。

(元禄十三年)

十月十五日

奥州様
八々御中

せ 分

二〇四二 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

侍從殿

左中將

一筆申入候、稻葉丹後守義御老中被 仰付之、難有仕合、恐悦之至奉存候、
丹後守殿者不及申、美濃守殿始、何難有被存段察存候、奥并貴方難有段、
察入候、於品川^後可爲御恐悦候、丹後守殿^後爲御祝儀、以渡邊隼人申達候、
貴殿へ御祝詞申、目錄之通進之候、猶隼人口上申含候、恐々謹言、

(元禄十四年)

正月十八日

左中將

稻葉正往
老中トナ

侍從殿

綱村

二〇四三 萬壽寺綱村夫人 消息

な茂く、越前守殿よりも御志うき下され、よましくい日井、悦らる、そ
やせ御使しやこくさされ、存よく御きなんよく御さ被成候よ、く日
くう事給、めてさく悦らる、こ、元 品川、御き嫌よく、越前守殿いよ、
ろろくとき嫌よく御さ候ま、めてさく御心やそくお不しめ、あされ
候へく候、と、

稲葉正往
使役祝

(稲葉正往)
丹後守殿、つこう成御、仰付させらる候御祝義、あ、日、さ、あ、
そやと御使しやみえ、御文御もく、迄くの、とく下され、めて、さ、あ、事、
く、ニ 公方様御機、多んよく、丹後守殿、あわ勢よ、御つとめ候やう、
と、い、日、井、入、悦、ら、る、仰、ら、る、候、と、く、 品川様、そ、め、越前守殿、きやう、さ、い

中、有か、さく悦申御事、申はく、さく、さく、そん、ら、る、仰、ら、る、候、と、く、(潮信)
ん院、御本もふ、ニ、覺、し、め、候、そ、ん、と、一、く、不、有、う、さ、く、存、ら、る、め、て、さ、く
と、

(元祿十四年)
二月九日

御返事
中將様 人々御申

せ
か

二〇四四 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

侍從殿

左中將

公方様益御機嫌能、天下一同奉恐悦候、(綱宗) 家君御勇健之旨、追々承知、恐悦
御同意存候、貴殿庖瘡無滞御仕舞、酒湯御懸候由承之、千秋万歳目出度大
慶御同意候、品川よ、御悦、奥悦察申御事御座候、丹後守殿御始、遠江守殿

吉村ノ瘡

以下御悅、是又察存候、宮床よて、大慶無申計候、下々迄、恐悅安堵之義候、御祝儀爲可申、以橋本玄番、御小袖樽肴進之候、委細玄番可申候、奥よも無異、珍重候、我等後堅固候、猶期後喜候、恐々謹言、

左中將

(元祿十四年)

二月十四日

綱村

侍從殿

(吉村)

二〇四五 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

侍從殿

左中將

大河内源太夫歸國委細之口上承之、自筆之御狀披見、滿悅之至候、家君益御機嫌能被爲成御座之旨、恐悅奉存候、奥方無事、令大慶候、貴殿瘡瘡無恙被仕舞、段々被肥立候之由、目出度大慶此事候、源太夫附置候禮等被御

吉村ノ瘡

申聞、慇懃之義候、源太夫具申聞、様躰承、悅入候、返事悅旁、以飛札如斯候、恐々謹言、

左中將

(元祿十四年)

三月九日

綱村

侍從殿

御返事

二〇四六 萬壽寺 消息

綱村夫人 稻葉氏

返く、いよく御き参んよく御さなされ候はんや、めてさく祝なり、まぐくも、いよくそくさ非にて、十五日ニハ、侍きしや、きへまいる、まぐさまいらせ候はんや、うれしくそんし、めてさく祝なり、

一筆申あをり、いよく御機嫌よく御さ被成候はんや、めてさく祝まいらせ候、こゝもと、品川様いよく御き参んよく御さあさ候、越前(吉村)守殿さんく御ひさち、成不ときけんよく御さ候ま、御心やどく覺

め一被成候へく候、まつく十二日ハ、御臺様(淨光院)へいつもの通、庭の花
 ひろ田御津ういみま志ん上いさう所ニ御志ゆひよく御ひろう被
 成、との外御機嫌のよ一にて、御めあ度祝申候、いつもの通、御ミヤの御
 さうかもまいり候て、いさ丹(稻葉正往)後守殿へ、年頭
 又ハ御盆く 仰付させらま候御祝うさくニ、まいり候はんよ、申入
 候へハ、いまたれく方うさかとのをそんなも出来不申、そんな(萬事不自由)ふちゆふニ
 も御さ候、少くままいなと御申付候所も御さ候、その内御さんきんの
 時分ニも成候へく候、又ハ越前守殿もなびく御ひさち候はんま、れ
 かしくハ、三人一志よニ御いさ丹被成度候ま、まつく(築地)はき御や
 きくおんおんたうへさんまいいいさ候ハ、よく候へく候、殊ニ今不
 花もちうりみま候ぬ、御はき御う候はんま、はるまなうら、四五
 日もとうまういさ、なくさみりやうニと、仰被下候ニ付、十五日ニは
 き御やきへまいり候はんやそんなう、御まへ益分も、御はるまの
 候、めてさくま。

をりふ、よきやうニ仰つらまさ被下候へく候、御さんきんも、さん
 ん御ちうくニ成、めあさは、ことハいはニすくま、めまさき御事のま
 ニて、御まちうけいさうハんや、一不くめあ度祝う、下ふさ(本多康命)の
 守殿御ふさ所も、きけんよく御さ候ま、御心やまよく覺め一被成へく
 候、めてさくま。

(元祿十四年)
三月十三日

奥州様
人々御申

分
せ

二〇四七 萬壽寺綱村夫人 稻葉氏 消息

返く、いよく御道中御機嫌よく御さなされ候はんや、めてさく祝う、
 品川様へ仰上させらま候よ一にて文、うさけまく存る、めてさくあ
 しく、

廿五日の御日付み之文、かこい巻れくそんしり、いよく廿六日ニ御
かつそくのよし、めあこと、いよく御道中御機事よく、來月三日ニハ、
するくや御つきの御事と、めあ度いと舟入り、仰らま候とく、ひさひ
さにて、公方様へ御めみへ仰上させらま、品川様へも御めまへ阿そ
は、越前守殿いつまも、久々にて御めよか、ま、めあこと申上り、はん
と、悦り、越前守殿すきくや御ひさち、御待う事申され候はん事、扱さ
てめてこと、申つくしうとくそんしり、品川様いよく御き事んよ
く御さあされ候ま、御心やまく覺め、被成へく候、めてとくと、

(元祿十四年)
三月廿九日

奥州様
御返事人々御申

二〇四八 毛利匡廣書狀

昨日者預御手紙候處、罷出、不能則報候、文祿二年六月、朝鮮國晋州攻之
儀、豊臣之譜ニ相見え申候、六月以前、無更相調候處、右晋州攻之儀、御不審
思召之由、被仰越候、林春常ニ御尋被成可然存事御座候、以上、

(元祿十四年)
五月六日

毛利甲斐守

松平陸奥守様

二〇四九 毛利匡廣書狀

猶々致何角、未致御見廻候、いり様以參可申述候、以上、
昨日者又々預御手紙候處、對客、不能即報候、晋州攻之儀、秀吉公之譜下
弓十九枚之所ニ而、秀吉公之御存念可相聞様ニ存候、彌御覽可被成候、
今度御用ニ付而、諸家差出候ハ、御當家御代已來儀ニ而、秀吉公之朝
鮮攻等ハ、何方も不指出之由承及候間、御用相濟候已後、春常ニ御尋被成
候者、彌相知可申と存事御座候、已上、

(元祿十四年)

五月八日

毛利甲斐守

松平陸奥守様

二〇五〇 伊達綱村書狀

(稻葉正往)

(柳澤吉保)

御自分縁之事、丹後守殿申談、出羽守殿御老中方にも申達候、兼郁上京之時分爲申登候、來四月中にも、婚儀相調度存候、品々和泉可申候、以上、

(元祿十四年)

十一月廿六日

綱村

越前守殿

二〇五一 伊達綱村覺書

覺

一年比相應之方も候ハ、四月中婚儀相調度候、年比ニより、來々年迄延引之義も可有之事、

吉村ノ夫
人ヲ公家
ニ求ム

一我等實子出生候ハ、養子ニ被成候ニ付而、大名衆ハ之縁組ハ難成候、高家衆之義も、江戸ニ被居候ハ、何角与不可然義も可有之候間、遠慮ニ候ハ共、公家衆之義相伺候事、

一妾ニ指置候義ハ、不同心ニ候、品々和泉可申候、

一明廿七日南長屋ニ候、表居間、鋏始手斧始申付候事、委細之義權

内可申候、

以上

(元祿十四年)

十一月廿六日

二〇五二 伊達綱村書狀

猶々難有仕合、同意奉存候、以上、

冬姫土用
ノ獻上物

御狀致披見候、然者從冬君土用中窺、御機嫌献上物之儀、丹後守殿ニ被得御内意候上、豊後守殿ニ被窺之候處、彌奥方同前献上物、後仕、奉窺、御

機嫌候儀、無御異儀候間、十二日献上可仕之旨、御指圖付、十二日朝、公方
 様御臺様に、首尾能献上候、一位様に之献上物者、十二日者三之御丸に
 御成ニ付、不罷成、十三日朝献上候、始而奉窺、御機嫌、献上物後仕、何
 方後首尾能、恐悅之旨、同意奉存候、八重姫君様に、十三日献上、恐悅
 之旨、是又同意奉存候、段々御指圖之趣等之儀者、委細木幡木工助方方申
 越候、豊後守殿丹後守殿段々被入御念候故、首尾能御座候段、委曲致承知、
 忝大慶存候、我等方方、御禮申達事候、品川様益御機嫌能被成御座之
 旨、致承知、恐悅奉存候、奥方貴殿二方無異之由、珍重存候、我等彌堅固候
 間、可御心安候、恐々謹言、

左中將

綱村

(元祿十五年)
七月十九日

越前守殿

御返事

二〇五三 伊達綱村書狀

猶々、難有仕合共奉存候、以上、

冬姫始メ
テ綱吉夫
人ヨリ拜
ス領物ヲ

御別紙致披見候、十二日晚方、從、御臺様冬君に以、御使、絹縮五端、御箱

肴拜領、難有仕合之旨、同意奉存候、恐悅之程、察入候、始而拜領物被、仰

(秋元喬知)

付候付而、貴殿方も御禮申上儀可有之候、但馬守殿に御越可然候哉之趣、

(稻葉正往)

丹後守殿に御窺候處、始而拜領物有之儀候間、但馬守殿に御越可然由、御

(阿部正武)

指圖付、十三日朝、但馬守殿に御越御禮被御申上候、豊後守殿にも御越、十

同献上物

二日十三日、冬君方首尾能献上物仕、且又從、御臺様拜領物仕候段、右献

上物之儀付、段々被入御念候、御禮旁被御申達候、丹後守殿にも御越、被御

申置候、取分、此度者丹後守殿殊外御世話被成候而、御指圖之旨、委曲被御

申聞趣、令承知、忝大慶存候、豊後守殿丹後守殿に、我等方方御禮申達

事候、恐々謹言、

左中將

稻葉正往
阿部正武
配慮

(元祿十五年)

七月十九日

綱村

越前守殿

御返事

二〇五四 阿部正武口上覺書

(包紙ウハ書)

口上覺

口上覺

奥州志田郡師山要害屋敷及大破候、右之屋敷無之候而後不苦候付而、被相禿度旨、書付之趣得其意、各々申談候、勝手次第可被成候、以上、

(元祿十五年)

八月十九日

阿部豊後守

松平陸奥守様

二〇五五 田邊希賢治家記録編纂伺書

覺

師山要害
屋敷ノ破
却

治家記録
編纂ニ關
スル希賢

ノ意見
性山公治
家記録

卷付

卷頭

月日

誕生卒去
等ノ場合

一 書名之事、(羅宗) 性山公治家記録と名付申度奉存候、

惣而實録之類、皆謚號を稱シ申候、諱を稱シ申事無御座候、

二 卷付之下、二行ニ何年より何年ノ至ルと書申度奉存候、

三 卷頭、性山公と記シ、御諱等御父母等を委ク載可申候、

四 年號之下、公御年何歳と載可申候、

年々、御父子御夫婦様方不殘御年迄被相載候、此分ハ相除キ申度奉存候、御隠居様御家督様御奥方様等之事ハ、其御方様之出候所ヨテ、具ニ相記シ申度奉存候、

一 月々を、別而表出不仕、日と同前ニ、一段上ケニ書申度奉存候、

一ヶ年、一ヶ月計事有之、月々無之故、月を表出仕候てハ、取あい申間敷と奉存候、其上日記ヨテハ無御座候間、月上ケハ、如何ニ奉存候、

一 御誕生御卒去御家督御隠居御官位等之所ヨテハ、幾度も、御官位御諱等迄委ク記シ申度奉存候、他家之儀も、姓名官位等迄相知候分ハ、委ク

尊稱

- 相記シ可申候、
- ・御記録之中、輝宗君と出申候所ハ、其人様之御記録ヨ御座候間、公と計記シ申度奉存候、
 - ・性山公之御記録ニハ、性山公と奉申、政宗君と可奉申候、貞山公之御記録ニハ、貞山公と奉申、忠宗君と可奉申候、
 - ・御之字、先ハ此方様計ヨ用申度候、他家之事ハ、御親戚之間ヨ御座候共、多クハ御之字を除キ申度奉存候、公之字も、同前ニ奉存候、
 - 公之字御之字を見申候而ハ、そヤ御家之事と知レ申候様ヨ仕度奉存候、

公方家ノ事

- ・公方家之御事者、本文ヨハ相除キ、末々其事之出候所ヨテ、注ヨ書入申度奉存候、
- ・第二ヶ條目々、月及日、皆圈を以上ヶ申度奉存候、
- ・同日之事、并其事之次而ヨ記シ、月日知レ不申事オトハ、圈を隔候て記

註

- シ可申候、註有之、其次ヨ書候所ハ、一段上ヶニ仕度奉存候、
 - ・註ハ、段々圈を隔候て書申度奉存候、
 - ・趣向者同ノ事ヨ御座候得共、文字を随分省略仕書申度奉存候、次第も、品ヨヨ前前後後へまハ一申候事も御座候、
 - ・惣而書簡之類、全文を寫シ載申事、
 - 全文をくさり書ヨ、年月日姓名迄書申事、
 - 全文之要を括まゝ、略シ載申事、
- 右三ヶ條之通、其書簡ヨ付而吟味仕、相記シ可申と奉存候、

以上

(元祿十五年)

壬八月

二〇五六 田邊希賢治家記録編纂伺書

覺

晴宗輝宗
父子不和
ノ記事ヲ
除ク

・一會津よりの誓詞、寫して被相載候所ニ、御文言之内ニ、晴宗様に相引、輝宗様に如在之儀不可有之と御座候、ケ様よてハ、御父子様之御間不宜様ニ相見え、後世まで相殘候儀、如何敷御事ニ奉存候間、寫してハ不被相載、右之文言ハ相除キ候而、趣を以書申候様ニ仕度奉存候、只今者御父子様御間之不宜由を存候者も無御座、世間ニ書記候物も、先相見へ不申候、ケ様之説ハ、相違申様ニ仕度奉存候、尤趣を以書入候得ハ、書躰も様子能様ニ奉存候、

政宗ヲ萬
海上人ノ
後身トス
ルハ載
セズ

・一貞山様者萬海上人之後身ニ御座候と申事、被相載候、此段被相除候而ハ如何可有御座候哉御記録ニ載候事者、勿論慥成事ニ罷成、永代迄傳り申候御事ニ御座候、貞山様御事萬海後身と申儀、後來ニ被相殘候而者、如何可有御座候哉、此御沙汰無之方、宜も可有御座哉と奉存候、書記候物も無御座、人ノ口傳迄よてハ、善惡共ニ、百年之後ハ相止申事ニ御座候間、後身之説ハ、一向被相除候方も可有御座哉と奉存候、書

編纂ニ偏
頗依怙ヲ
爲サハル
覺悟

載申儀ニ御座候ハ、性山様御記録よハ、御夢之段計被相載、其外ハ相除キ候而、貞山様御卒去之所、杜鵑被爲聞候事、經峰之事と書申候而、注よ後身之説を被記置候而ハ如何可有御座候哉、尤其所よて、書様も可有之様ニ奉存候、此段申上候儀、如何ニ奉存候得とも、存寄候儀ニ御座候間、申上候而、御思召をも伺置申度奉存候、惣而御記録仕立申候心入、人ノ鼻眞偏頗仕候儀ハ勿論、諸道事々ニ付、偏頗依怙之心無御座、正直ニ相記シ可申覺悟、御意之趣ニ奉承知罷在儀ニ御座候、以上

(元祿十五年)
壬八月

治家記録
編纂ニ關
スル綱村
ノ意見

二〇五七 伊達綱村治家記録編纂意見狀

記録之夏、我等存念之様ニ好候而ハ、如何程希賢ニ申付候ても、遠慮而巳よて伺不申候ハて、書候義成申間敷候、吾等存念之様ニ好候而爲

綱村ノ存
念以外ニ
書クモ編
纂成就セ
望ムコト
ヲ

書候ハ、大慶ヨハ可有之候得共、それヨテモ、成就仕間敷候得ハ、我等
存念ヨ外ニ書候ても、成就仕、未代ニ傳ハ候方、そるかみ増ヨテ御
座候、事之筋道も、書様之委細之品々も、我等存念トモ別ヨテ可有之候、
又かやう之義之有ざるハ、かやう之可けニ而可有之と、推量いこ書
候義も、吾等受候と、希賢受候とモ、違可申候、其段迄も、吾等存やう
ハ不成事ヨテ候、たとへハ、五册七册ハ吾等いろねとも可申付候、皆々
モ堅ク不罷成事ヨテ候、

編纂ニ就
テハ希賢
ニ任ス

一 我等ニ申聞候も、(遊佐)好生ニ、是ハかやうヨテ能候半哉、あしく候半哉と、相
談いこ候様成儀ヨテ、畢竟希賢ニ諸事ヲ我等相談いこ候ても、畢
竟ハ吾等存様ヨ致候とくよ、希賢存様ニ致候事ヨテ候へハ、無別條
候、かやう之義之有ざるハ、かやう之可けヨテ可有之歟と、好生ニ存念
承候も、好生方々申聞候も、右同前ヨテ、吾等ニ承候も、吾等方々申聞候
も、同前ニ候へハ能候、知平方も同事みて候、とかく吾等之申候義ガ、證

諸説ハ忌
憚無ク書
キタシ

ニ成可申候ニ付、善惡ニ付、難申事ヨテ候、

一 萬海上人之後身かと、申儀ニ不限、儒門ヨリ曾而有間敷を、希賢撰ト
テハ書にくき義可有之候、此段ハ、いつとても儒者ニ命シ候へハ左、釋
氏ニ命シ候へハ右ニ記候義、定タル事ヨテ候、此段モ、吾等書候へハ、儒
者ハいろやうヨ申候とも、釋氏ハいろやうヨ申候とも、構不申、傳モ
候義之のこり不申、いやれる事之有之モ、書度義之無之ハハかへ候て、
儒ニ成釋ヨ成、書候心入ヨテ候、希賢撰候共、諸臣等撰と書候ハ、差支
申間敷候、いろよても、希賢撰とてハカ、れ不申候義ヨテ御座候、是
ハ吾等ヲ希賢ニいこ候ても、書申候義ハ成不申候、且又いつとても、
何記録ヨても、釋門神祇之者之書候記録ハ無之候故、儒官之書候事而
已ニ候へハ、かやう之義モ書申事ハ有間敷候、文德實錄三代實錄かと
みハ、大分ニ佛之事御座候へ共、書候品も可有之候、又むこ被命候
而書候ハ、希賢とても、書不申候ハ、縁モ成不申候、此段御考候て書候

天文内証
モ有ノマ
ハヲ記ス
ベシ

者可然候

一會津之誓詞と之義ニ付、不宜義ヲ書候義、天文内乱之義と之事、是亦希賢撰トテハ被書不申義御座候、吾等書候も、代々考ニハ綱村纂ト書候得共、性山公貞山公記録ニハ、諸臣等と書申候、右之筋御座候、天文内乱ハとかくかくれぬ事、かく候テハ諸事指支申候、外之義ハ何様も罷成事ニ候、扱又何方之記録も、不善ヲ掩ひ、小善ヲ大善ニ書候テ、我寺之佛尊トシ書候故、信シかしく、大ニ善キ義も、それ不とよテ者有間敷と疑ひ、少シ不宜義も、大キニあき事よテ可有之と疑ひ候やうニ成申候を悔ひ候テ、如此無之記録ヲ信シ候やうニ願申候へ共、是も仕よくき義共可有之様ニ存候、

一此外之義共ハ所々へむらひ、書付又ハ口上も可申談候、以上、

(元祿十五年)
午

閏八月廿四日

田邊氏

(綱村)
村夫

記録ノ通
弊ニ陥ル
ヲ戒ム

遊佐好生
覺書

覺

御先祖様御記録仕立候義ニ付、

田邊喜右衛門伺書 貳通

御自筆御書付 壹通

○左ノ一通ハ第二〇五五號第二〇五六號及ビ第二〇五七號ノ三文書ニ附屬セルモノナリ、

治家記録
ノ編纂

右者、元祿十五年六月、御前ニ御奉行衆大河内源太夫被指置、御家御記録之儀、至而重キ事ニ被 思召候品々、段々御意被成候上、拙者亦被 仰付候者、只今迄御記録下書首藤彌兵衛ニ被 仰付、其上を 御前ル而御吟味可被遊と被 思召候得共、大分之事よ而、最早被爲成間敷候間、今度田邊喜右衛門ニ可被 仰付候、其方亦被 仰付候とも、可罷成候得とも、身分輕ク候故、末々御子孫様も御家中も、其御記録を不信候様ニ可罷成候間、難被 仰付候、其方随分吟味仕り、無遠慮喜右衛門ニ可申談候、喜右衛門儀、只今御曹司様ニ被付置、御大切之御時よ而、難被相下候間、其方江戸ニ罷登、何様

御記録仕立可然と能々致吟味始二三卷より而書例も相濟可申候間何
 様も相極候而御國許に喜右衛門同道罷下喜右衛門相伺候而江戸に
 罷登候様ニ仕候ハ喜右衛門御國許ニ逗留も有之間敷候間其方早々罷
 登候様ニ被仰付罷登致相談八月喜右衛門同道罷下喜右衛門伺書指
 上御自筆を以品々思召之趣被仰付候御事ニ御座候御代々考御編
 被成候天文内乱之事迄思召御座候間如此書付指置申候以上
 享保七年壬寅三月 遊佐次郎左衛門

二〇五八 伊達氏先祖書上書式寫

(包紙ウハ書)
 折井淡路守殿ノ猪狩長作ニ被相渡候 御四代補任御書上可被成旨御案詞被
 相出候寫壹通御本紙ハ淡路守殿へ返上可仕筈ニ而御座候尤御返上被成候也
 右御書付拙者共相伺可申旨被仰付相伺候處 御自筆御書入被遊候
 御案文壹通
 元祿十五年九月廿八日 田邊喜右衛門
 遊佐次郎右衛門

○右包紙ウハ書第二〇五八號第二〇五九號ノ兩文書ニカ、ル、

折井正辰
 形ヨリノ雜

(端書)
 元祿十五年九月折井淡路守殿ヨリ被相渡候御本紙之寫也正宗と御書付
 被遣候也

母 誰息女 **松平陸奥守** 綱村
父之實名迄 家女ニ候ハ、家女を計御書付可被遣候

父官名
 母 誰息女 **松平陸奥守** 正宗
父之實名迄 家女ニ候ハ、家女を計御書付可被遣候

母 誰息女 **元美作守越前守 松平陸奥守** 忠宗
父之實名迄 家女ニ候ハ、家女を計御書付可被遣候

實父之官名實名 **松平越前守** 吉村
 母 誰娘 父之實名迄 家女ニ候ハ、家女を計御書付可被遣候

二〇五九 伊達氏先祖書上案

(附書)
一元祿十五年折井淡路守殿ヨリ被相渡御案詞之通ニ如此書立奉伺候處 御直ニ所々御書入
被遊候尤被 仰付相考政宗ニ相調指上候也

此一行御書入

松平陸奥守家來

實父 伊達肥前宗房

松平越前守

吉村

一字御書入

此以下御書入

養母 稻葉美濃守越智正則女

松平陸奥守

綱村

母家女

元美作守越前守

松平陸奥守

忠宗

二字御書入

坂上

母 田村大膳大夫清顯女

伊一〇中

二字御書入

伊達

父 左京大夫輝宗

御晚年正字ニ御改被成候哉
吟味可仕由如此御點被遊候

元左京大夫美作守越前守

此一行御書入

松平陸奥守

政宗

一字御書入

母 最上修理大夫義守女

二〇六〇 伊達綱村書狀

猶々冬子女使始而指上、難有仕合、同意奉存候、幾久女使差上候様と奉祝
候、一位様へ後、又よて女中衆へ申上候様と相濟、是亦難有仕合奉存候、以
上、

一筆申入候、去十四日冬子方々女使始而差上候段、致承知、難有仕合、大慶
同意之御事候、殊使中津儀拜領物被 仰付、冥加叶候仕合、難有奉存候、冬
子難有うご之程察入候、幾久差上候様ふと祝申候、御祝儀爲可申入、以飛
脚目錄之通進之候、右之御禮、御老中へ以飛札申上事候、寒氣候得共、品

吉村夫人
使始ラメテ上ル

河様益御機嫌能被成御座之旨、追々承知、恐悅奉存候、奥方貴殿二方無異之旨、悅申事候、當地無別條、我等彌堅固候間、可御心安候、恐々謹言、

左中將

(元祿十五年)
十二月廿一日

綱村

越前守殿

二〇六一 伊達綱村書狀

猶々、珍重之儀候、以上、

御狀致披見候、餘寒候得共、品川様益御機嫌能被成御座之旨、恐悅奉存候、奥方貴殿二方無異之由、悅申事候、然者去十五日爲歲暮之御祝儀、奥方響應、八つ過御越、緩々御祝候、依之目錄之通被贈之候、幾久祝入候、冬君も相伴ニ而候、七つ半時過御歸候由、珍重存候、委曲示給之趣、御念入事候、當地無別條、我等彌堅固候間、可御心安候、恐々謹言、

歲暮ノ饗應

左中將

(元祿十五年)
十二月廿一日

綱村

越前守殿

御返事

二〇六二 伊達綱村書狀

猶々、冬子方迄 上使被成下拜領物被 仰付之、重疊難有仕合、同意奉存候、品川様難有可被思召奉察候、孝勝院様御影と、忝仕合奉存候、將又今日者煤拂、目出度存候、如去々年、茶屋へ相越祝申候、若狹殿より肴進上被致候、例年之通七種連歌内會もいとし候、立春以後、日々風つよく候、殊外長閑よて、春之日影よて御座候、此段 品川へ不申上候間、御序ニ可被申上候、奥へも姫君へも御申可有之候、丹後守殿へも右京太夫殿あとも、御咄可有之候也、

一筆申入候、去十八日冬子方々、爲 上使以中根兵右衛門殿、歲暮御祝儀

吉村夫人
歲暮ノ祝儀
ヲ拜領ス

煤拂ノ祝
七種連歌

縮緬干鯛致拜領候由、難有仕合、同意奉存候、冬子難有かこの程察入候、幾久拜領候様ふと、祝申事候、御祝儀爲可申入、以使者目錄之通進之候、寒氣御座候得共、品川様益御機嫌能被成御座之旨、追々致承知、恐悅之至奉存候、奥方貴殿二方無事之旨、悅申事候、爰元無別條、我等彌堅固候間、可御心安候、恐々謹言、

左中將

綱村

(元祿十五年)
十二月廿七日

越前守殿

二〇六三 伊達綱村書狀

猶々、女冬子迄 上使被成下、御祝儀拜領被 仰付、重疊難有仕合、同意奉存候、以上、

綱村吉村
夫人人歳
兩夫人儀
暮ノ祝儀
ヲ拜領ス

御狀致披見候、去十八日五ツ時過、奥方(稻葉氏)爲 上使折井仁左衛門殿を以、

如例年歳暮之御祝儀、御綿干鯛拜領之由、難有仕合奉存候、冬君方(久我氏)爲 上使中根兵右衛門殿を以、縮緬十卷干鯛一箱拜領、難有仕合奉存候、始而之儀、一入難有仕合被存之旨、尤之事候、於私難有大慶奉存候、爲御禮御老中方美濃守殿右京大夫殿に被相越候、仁左衛門殿兵右衛門殿に以使者被申達候、若年寄衆御側衆御留守居衆にも以使者被申達候由、令承知候、上使御出之節、奥方に伊達左京亮殿毛利備前守殿稻葉河内守殿稻葉靱負殿御越、桑島孫六殿も彼參候由、委細被御申聞候通、御念入事候、餘寒候得共、品川様益御機嫌能被成御座之旨、追々承知仕、恐悅奉存候、奥方貴殿二方無事之由、悅申事候、當地無別條、我等彌堅固候間、可御心安候、恐々謹言、

左中將

綱村

(元祿十五年)
十二月廿八日

越前守殿

御返事

二〇六四 伊達綱村書狀

猶々恐悅之至同意奉存候、以上、

御飛札致披見候、公方様益御機嫌能成御座、年始之御禮被爲、請
之旨、恐悅同意奉存候、貴殿去二日朝六ツ時登、城、御太刀目錄献上、御禮
被申上、着座、御盃頂戴、其上御時服拜領之、重疊難有仕合之旨致承知、
忝仕合、同意奉存候、依之拜領之御時服被指越之、難有奉項戴候、泉田出雲
儀、首尾能相勤候由被御申聞、大慶奉存候、御端書之趣令承知候、二日雪
夥敷降申候付、御老中方に御越之儀、二日ハ相扣可申由、御老中依御斷、何
不被參候付、御延引候旨、旁委曲示給之趣、満足之事候、品川様彌御機
嫌能被成御座之旨、恐悅之御事候、奥方貴殿二方無異之由、悅入候、當地無
別條、我等愈堅固候間、可御心安候、恐々謹言、

吉村登城
献上下拜
領

左中將

(元祿十六年)
正月九日

綱村

越前守殿
御返事

二〇六五 伊達綱村書狀

(端裏内封ウハ書)

越前守殿

陸奥守

此間序候而御咄申候我等召仕候者共、未々共ニ、吾等同前ニ被召仕候や
うよ可有之事、善惡之義を其身次第、其段共ニ我等も同ノ事にて御座候
段、乍勿論御同意之旨、珍重存候、御挨拶ニも不及義み可有之候へ共、御
念入候義、重疊致安堵候、恐々謹言、

(元祿十六年)
五月廿三日

綱村

綱村致仕
後モ召使
人ニ變動
ムナカラシ

二〇六六 伊達綱村意見狀

(糊封ウハ書)(封目)
一 (花押)(綱村)

越前守殿

陸奥守

綱村致仕
へ時吉村
忠告

覺

一諸事吾等よ爲御聞候てハ、我儘もいさし、其上貴殿被成みくき儀共可有之と、奉行共始可存候、親類中も右京殿始被存、丹後守殿も可思召候、一不及申候へ共、事々御相談も有間敷候へ共、跡先不存候へハ、誰よても相談ハ難成候、當分ハいりやうよも相談成可申候、末ハ其時々之様子不存候ニ付、不罷成事よて候、

一人之様子、其者之格式、役目之品々、軍用之様子、我等など、奉行共始のミ込不申候間、密々何やうよも御尋、夫へむらひ能様よ御分別、諸事可被仰付候、御尋無之候ハ、大分違出可申候、御聞候て用捨之義ハ、必御遠慮有間敷候、

一御家之格式、能々御尋可有之候、是を御先祖代々品々等之義ニ候、

右兩條ハ、深ク御隠し可被成候、御相談候と御座候ハ、無用と申義

出可申候、さ候ハ、御行當可有之候、奉行共へ御きりせ候て可然と申候而も、末よつりへ出可申候間、御一人之心中ニ御隠し置、段々之もようよよ、御尋候段知候而も、能可有之候、然共余よよく御知り過候て、ふらん立可申候間、口上又も余りかく候様ニ不被成、尋よ被遣、りやう之品と申進候様ニハ被成可然と存候、能々御了簡、是を唯今之内、直談被成可給候、以上、

(元祿十六年
末)

七月廿六日

陸奥守

越前守殿

二〇六七

伊達綱村意見狀

(糊封包紙ウハ書)
元祿十六年八月三日 肯山公ハ被下候御自筆我等家督之御目見之節家來共 御目見願之義ニ付而指上物等名元被仰下候御書付

(封目)
(花押)(吉村)

吉村家督
ノ時將軍
ニ認見ノ
家臣

伊達家文書之五

覺

伊達安房

伊達兵庫

安藝と改可然存候

伊達若狹

目指支可申哉吟味可然候指支候ハ、伊達左兵衛可然候、先ハ若狹可然事ニ候

柴田中務

人數多
候ハ、石母田織部

片倉小十郎

前々ニ取可然候

遠山帶刀

布施和泉

人數多
候ハ、但木下野

家臣等
獻上物

人數多
候ハ、後藤上野

一急ニ指支候ハ、爰元ニ罷在候者被指出可然候

一一門一家家老、上野ハ家老同列と成共、同格と成共申上可然候

一時服六銀馬代三人、中務織部ハ時服三銀馬代、小十郎ハ時服五銀馬代、

外ハ時服二銀馬代、又ハ時服五銀馬代三人、小十郎時服四成共、中務織

部時服三成共、或三人と小十郎五ツ、跡ハ皆二ツ成共、小十郎と一門衆

同前ニ而も、いつれよても苦間敷候、家老銀馬代計ハ如何、時服三ツハ

苦間敷候、中務織部ハ高もよふと違、一家旁外之者と一ツよハ如何、小

十郎ハとかく多ク可然候、上野一人銀馬代も如何ニ候、下野ハとかく

家老よて候、

一石母田織部 御目見仕事ニ候ハ、石母田之本座可然候

右爲御心得、委細書付進之申候、以上、

(元祿十六年)
七月廿九日

陸奥守

伊達家文書之五

越前守殿

伊達綱村直
就テ意見

二〇六八 伊達綱村意見狀

若狹殿儀、今朝帶刀申上之由、御挨拶共ニ申聞候、我等申候と違申候、
左ニ委細申進候、

將軍謁見

吉村家督
ノ際村直
ニ遠慮ス

今度若狹 御目見之儀、目之様子見苦敷、如何可有之と存候、乍去此度
ハ、一入若狹 御目見願申上度、貴殿可被存候、元來若狹ハ相續之筋目
ニ候ヘ共、歳出合不申、貴殿を養子申上候事ニ候故、諸事我等分式部殿
ニハ、めあい志らひ候様ニハ、被成に、可有之候、此段を申候ヘハ、貴
殿も、内々今度ハ、若狹ハ相續有様ニ被成度思召候ヘ共、此節さやう
ニハ成かさきとけよて候故、不被御申出候と御咄候由、喜右衛門申候
ニ付、成不とさやうよてハ吾等首尾あしく、隱居候ニ聞ヘ申候ニ付、さ
やうみハからぬ事よて候、越前殿思召ハ御尤ニ而候、越前殿思召之段

村直ヘ分
知ハ無用

ハ、丹後殿ヘ、右京殿申され候而をうれ可然候、此段々申上候様ニと、帶
刀ニ申付候間、さやうニ御心得可有之候、右京殿被申候ハ、からぬ事を
存ながら申候ハ、あしく御座候間、申間敷と被申候ヘ共、我等存候ハ、事
濟候て成共、咄みち、右京殿被申候て可然と存候、尤貴殿さやうニ被成
度と思召候と被申候ヘハ、其身ハ賢人之様よて、畢竟父之爲あしく被
致候ニ成申候、ぬハ相續被致候筋目よてハ無之候ヘ共と申事を、考も
かさやうよてあしく候間、被申候而可然と存候、是唯今之心付よて
候、たとヘ貴殿直ニ御咄候とても、賢人ぶらぬ御申様を成不と可有之
候、尤只今御申候事よてハ無御座候、人より、只今も、若狹殿と可被申
事と存候者も可有之候ヘ共、夫ハあき事よて候、
一若狹殿ヘ分知之事ハ無用ニ候、元來家來ニ成可被申人よて候、我等老
年ニ隱居候ても、死候而も、順を申候ヘハ、若狹殿ハ跡ニ被居候分、分知
可仕心入無之候、同一事よて御座候、美作殿ハ分知可仕人よて候、我等

實子へゆつり候へハともかくも、貴殿を養子いさ候上ハ、分知等仕候へてハ不叶候、品違申候、此段も可申上候由申付候、申上候由帶刀申候、以上、

(元祿十六年)

八朔

陸奥守

越前守殿

二〇六九 伊達綱村意見狀

(糊封ウハ書)

覺書

(封目)

(花押)(綱村)

覺

一筋目よて計被召仕候ハ、思召之外あゝき事共出來可仕候、筋目よ御構無之候ハ、先祖之勤功皆無よ成可申候、
一かろき者御取立無之候ハ、殊外指支可申候、

家臣取立
村ノ就テ見

一加増新知不被下候ハ、殊外指支可申候、器量之有之、其役くよ御用之者計御取立候てハ、段々被召仕候次第よ合不申、器量計重く成候故、才ニふなり候氣味よ成、側むき之者計御取立候へハ、側廻り之者計威勢つよく成申候、

政宗ノ時
ノ立身者

貞山公ハ、御小性立之者、御側むきより立身まれよて、かろき者共、才よて立身多ク候、たとへハ、鈴木和泉山岡志摩佐々若狹等を御覽可有之候、片倉小十郎てよてよて御座候、只今よて可申候ハ、金須織部大槻采女山家修理氣味合よて御座候、

忠宗ノ時
ノ立身者

義山公ハ、才よて立身無之候、御小性立、御側むき、或定供かとが、武頭ニ成候氣味よて候、古内主膳馬方より立身仕候へ共、念者よて立身仕候事よて御座候、鶴田駿河外老、指當覺不申候、我等ハ、兩様共ニ引合取立申心入ニ候へ共、貴殿も我等もオヲ用無之候ハね老成不申候付、才之有之者立候て、小性立るとも、才あき者

ハ立身成兼可申候、乍去、それハ御了簡可然哉と存候、我等只今迄之いさやう外より御覽候而、不可然思召候事可有之候、被成候而御覽候ハ、思召之外指支共可有御座候、必末ハ我等申候と思召合可有之候、其御心得可然様ニ存候、

一我等段々人をつらひ立、半途ニつらひ立候ニ付、只今迄之筋よて不被仰付候ハ、只今迄之者之仕合不仕合、其品之相應各別之違可有之候、其元ニ而被召仕候者も、又夫ハ應ハ御取立無之候ハ、不都合ニ罷成候事ガ思召ニ合兼候共、とかく加増新知くらハ不被下候ハて、成申間敷候、扱又も、とかく人もつらハ御取立被成候様ニ仕度候、惣而メリ候て、物を被成候半と思召候、我等めつニ仕候と思召候而可有御座候間、御申可有之と思召過候ハ、被召仕人有間敷候、尤めつニ御氣まうせニ被成候ガ能と申事よてハ、毛頭無之候、(一脱カ)たとて可申候ハ、要人ふと、無御遠慮若年寄ふと被成、文五郎よても、小性

頭ニ成共、被仰付可然候、かろき者共も、器量次第被召仕可然存候、中々織部采女ふとき者有之事よて無御座候、北圖書を取立申候、奉行職よと、奉行共も存候ハ共、大所頭之末よて候故、余と存ひラハ、指置申候、其上をこりめ成者よて候故、押へ置申候、織部ふと、ハ又様子違、奉行職ニ成ふと相應ハ見へ申候、圖書織部采女ふと不取立候てハ、中々成事よて無御座候、其者一人けん、取立候事ハ、被成損之時不宜候間、とかく大勢段々ニ、才有之者も、筋目有之者、側之者も、御取立無之候ハて、指支可申候、義山公のやうニ、小性立の者計立身ハ、至而不可然乍憚存候、小性立之者を御取立無之候ガ、能事よても無御座と存候、器量有之、才有之者も、何も不申候ニ付、和泉をいめ、用ニ立不申候と被仰候而ハ、いやと不被申候ハ共、但木伊賀和泉ふと、とど申事も、大形之者ハ成申間敷候、取あハ申候よてハ、毛頭無御座候、

跡先仕候、圖書事申候、伊賀和泉をいめ、うら取立可申と、をぬり申候、

是ハ、伊賀ハ宿老之麁流、和泉も長沼外記惣領筋、長沼佐左衛門先祖
あと、同一恰好よて、扱ひさしき御譜代よて御座候、圖書ふど、ハ
違申候、

右存付候分、書付進之申候、以上、

(元祿十六年)
八月五日

陸奥守

越前守殿

猶々、さして御返書ニハ及申間敷歟ニ候、以上、

二〇七〇 伊達綱村口上覺書

(折封ウハ書)

口上之覺

覺

一家來九人、御目見被 仰付候由、重疊難有可被存候、同意難有奉存候、
一可被改陸奥守由、恐悅之至、千秋万歳目出度存候、品川よも、恐悅可被思

家臣九人
將軍ニ謁
見ス
吉村陸奥
守ニ任ズ

綱村上總
介ニ改ム

召候、家來數多御目見之儀、重疊難有可思召候、

一私可改上總介旨、忝仕合奉存候、

右之段々、丹後守殿へ宜被申上候、

以上

(元祿十六年)
八月廿六日

(綱村)
上總介

(吉村)
陸奥守殿

二〇七一 萬壽寺 消息

綱村夫人
稻葉氏

○コノ文書蓋シ元祿十六年ノモノナラム、

の事にて、一々不くうれしく存候、何もく御ねん入候御事とを、ウモ
く悦び、御ふいてう御礼のさめ申上らる、返く丹後守殿も、私とう勢
んニウさしけあかりの事にて御さ候、わさく、いよくそくさいニを
りらる、ま、御心やをくお不しめ、下され候へく候、めてさく、ト、

綱村夫人
隱居後ノ
合方

一筆申あぢり、殊外御心へくく成りいら勢候へとも、存よく御
機々んりる事を御座かく候よ承、めあこく悦申候、品川様御き嫌よ
く御さあされ、陸奥守殿ふさうさき嫌よ、おあ御事よ悦り、さやう
ニ御さ候へハ、今度わさくへのかうよよく此事、陸奥守殿ねん比ニ御申、
さ、いはまてのとりよ給候はんとの事にて、丹後守殿へもふいてう
申候て、かこくそんり、さあうら、今かとはいんきよの事よ
御さ候へハ、少ハ御斷申り、昨日陸奥守殿丹後守殿へ御出の時分、此
んを志記く御申候へハ、むつノ守殿も御き、と、けと

上總介様
人々御申

勢 分

二〇七二 萬壽寺 綱村夫人 消息

○コノ文書蓋シ元祿十六年十二月ノモノナラム、

綱村ノ移

桂昌院ヨ
村兩村吉
ノ拜領人

返く、この外心へり、いよく御きなんよく御さあされ候や、くく
う事給さくそんり、めてさく
一筆申あぢり、殊外うんり候へとも、御機々んりる御事も御さ
なく、うこもとへ御うはるそハ、御うつてをよく、御き嫌のよ承、万
く年も祝入悦り、品川御きけんよく御座被成、めてさあ
御事ニそんり、まつく昨日 一位様(桂昌院)よりいろちりめんつをり物
御さうあさいとやういたし、ありうたく存まいらせ候、さいとやうの
くり物、御あくさよ御めようけり、わこくよと、昨日御き
う、いまいらせ候、子こもりなん上いさ候へハ、萬御志ゆひよく
御座候て、めあこく悦り、きのふ 一位より冬君へもさいとやうも
の御さ候て、おあ御事ニありうこくそんり、こ、元二かさき嫌よ
く、私をそく災ニをり、ま、御心やよく覺めあされ候へく候、め
てさく

上總介
八々御中

勢 分

二〇七三 萬壽寺 綱村夫人 稻葉氏 消息

○コノ文書蓋シ元祿十六年十二月ノモノナラム、

返く、仔よく御機々んの事う事給さく存る、且さくもそくさいよ
をりなり、御心やまき覺しめ下され候へく候、めてさくト。

一筆申あけら、その外かんまいら勢候へとも、御機嫌うる御事を
御さかく候よし、めてさく悦なり、品河様いよく御きなんよく御さ
あされ、爰もと二方きけんよく悦なり、此中ハ陸奥守殿官位成下され、冬
君もくれの御志うき上使にてさいとやうの事、おあ御事ニあはら
くそんし、扱ハ此御つきんうつくく毛御さかく候へとも、うんき

吉村ノ任
官

のこめ御めニかけら、めてさくト。

分

勢

上總介様

八々御中

二〇七四 萬壽寺 綱村夫人 稻葉氏 消息

○コノ文書蓋シ寶永元年正月ノモノナラム、

(折封ウハ書)

上總介

八々御中

勢 分

返く、仔よく御きなんの御事、めてさくそんし、私もそく災ニと
うさ、い日井なり、あを春ふりく申上候へく候、めてさくト。

あら玉りぬる此春よりの御悦、いつかさをおあ御事よい日井入り、

はんさ免、こん日ひうらよく御座候ゆへ、申上り、冬君成ふとき々んよ
く御さ候よし申候まゝ、御きつうい被成まゝ候、めてさくじと、

上總介

人々御申

務

二〇七六 伊達綱村書狀

(糊封ウハ書)

陸奥守殿

綱村

吉村夫人
ノ著帶

猶々、姫君殊外機嫌好候由、追々承、大慶存候可御心安候以上、
御機嫌能被爲成御座之旨、奉承知、恐悦同意奉存候、(吉村夫人久我氏) 姫君着帶、千秋万歳目
出度存候、祝儀爲可申、以使者樽肴進之候、男子誕生、家相續候様よと願入
候、品川様御勇健被成御座候、殊外御悦之段、從先日承候、木挽町よも、
殊外悦、追々御申越候、於京都御大慶、丹後守殿御悦察存候、(吉村生母片倉氏) 貞樹院被悦、